
決戦！魔法学校の生徒会

ヨザクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決戦！魔法学校の生徒会

【Nコード】

N9544Q

【作者名】

ヨザクラ

【あらすじ】

魔法が幻想ではなく実在する世界。日本一の魔法学校ウェールズ学院には世界最高水準を誇る日本の魔法技術を学ぶため、国内外を問わず多くの優秀な生徒が集まっていた。そんなエリート達の中で主人公は自分だけの普通の生活を送っていた。いや送っていたはずだった…

第一話（前書き）

これは僕が初めて作った小説です
作者の自己満足に近いです
どうか優しい目で見てください

第一話

魔法

それは空想の産物

魔法

それは科学では説明できない存在するわけのないもの、だった・・・

しかしつい最近とある科学者が実験をしていると魔法が現れた

ひと昔前まで存在していなかった魔法の出現に世界は驚愕した

魔法の破壊力はすさまじく鍛え上げれば核爆弾にも勝るとも劣らない世界の列強国はその破壊力に目をつけ、軍事転用するために技術の解明を急いだ

しかし誰でも魔法を使えるわけではない

今の段階では魔法を使える人は限られており、使えるのは才能のある限られたものばかりだった

そこで世界の列強国は魔法を使えるもの、魔術師の育成に国の総力を決していた

魔法

この偶然の産物がこれからの世界を動かしていった・・・

永世中立都市 桜ノ宮市

魔法工学がさかんな人口50万人程度の都市

ここはつい最近永世中立都市として日本から世界に売られた都市だ

永世中立都市ということで世界中から人々が集まり、列強が一丸となって魔法の判明をおこなっている

ウェールズ学院

桜ノ宮市にある魔法教育機関

他にもたくさんある魔法教育機関の中でもトップクラスの学校であり求める生徒のレベルも高く一種のエリート校である

魔法を教える特殊な学校だけあって学年は7年制、授業内容も魔法関係のことばかりだ

在校生徒はここで祖国という重荷に耐えながら生活している

この物語はその学院で活躍する一人の生徒の物語である

+ + +

「おい行くぞ！」

黒髪の男が怒声を上げる

「遅刻するきか！」

彼が話しかけている金髪の男は眠い目をこすりいかにも退屈そうに言った

「だるい」

「いいから起きろ！！」

金髪の青年の反応を見ながら、彼は再び怒声を上げる

「わかったよ後五分」

彼は我慢の限界といわんばかりにその青年の寝ているベッドの布団を取った

「お前また不登校になるきか！！」

この男が怒っているのもしょうがない、なにせ金髪の男は1年間不登校だったのだ

「別にかまわない」

「いいから行くぞ！ライン」

ラインといわれた男は腰を上げ荷物を纏め上げた

「先に行け。俺は遅れてもかまわない」

「ああ、わかった」

そういつて黒髪の青年は走り出した

ラインはそれを見送ると・・・

「行ったか・・・」

また深い眠りに着いた

+ + +

あのやろつふざけるなよ

あいつのせいで遅れてしまったじゃないか

帰ったらぶん殴ってやる

俺がそんなことを考えながら学院に行く途中だった

「ここどこですか？」

横から変な声が聞こえてきた

最初は無視しようかと思ったが女の子の声だったので顔だけでも見ていこうと思い近づいた

「誰か・・・あつ！そこのお兄さん、その制服はウェールズ学院のじゃないですか？」

そういつてその女は俺に近づいてきた

「そうですよ」

「だったら、学院までつれてつてよ」

「へ・・・？」

その一言に俺は驚きついへんな言葉を上げてしまった

なぜなら今まで女の子と一緒に歩いたことなど一度もなかったからだ

「だめ？」

「いいですよ」

しかしここはあまり変な反応をせず軽く受け流・・・俺の口はもう勝手にしゃべっていた

どうやらこの幸福にもっと浸りたいようだ

「やったー！ありがとうございます」

笑顔がかわいい

「私はウェールズ学院1年A組神近桜です。よろしくお願いします」

「ああよろしく」

そして俺たちは歩き出した

+ + + +

「そういえば今日は入学式だったな」

「はい、そうです」

「そうかあ、新入生か・・・」

すこし話たらずぐ校門が見えてきた

「ありがとうございました」

「ああ頑張んな」

「はい」

女の子が行くのを見送ると

「俺も急がなきゃな」

俺も走り出した

+ + + +

若干遅刻気味ということで講堂はほぼ満席だった

2000人近い生徒が集まっているのでそこは見ているだけで壮観だった

別にどこに座れなど指定はなかったので近くの席に座った

あと10分

さっきまでの騒々しさが嘘のように講堂内は静まり返った

昨日の疲れがでてきた・・・

+ + + +

・・・眠っていたようだ

ん・・・今は新入生代表挨拶の頃か・・・

「新入生代表挨拶、新入生代表神近桜前へ」

ん？さっき聞いた名前があったような？

まあ気のせいか・・・

なんせ新入生代表挨拶をするのは入学試験の主席がやるはずだ
まさかあの迷子の女の子が学年主席なわけがない

まあ俺には関係ないしどうでもいいか

+ + + +

入学式が終わるとクラス分けテストの結果が張ってあった

学力主席 天和 京介

実技主席 天和 京介

総合主席 天和 京介

「俺のクラスはつと・・・」

あつた3年A組だ

「あ・・・同じクラスですねよろしくお願いします」

「ああよろしく」

横からいきなり声がして少し驚いたように返事をする
振り返るとそこにはいかにも礼儀正しそうな男がいた
なんだ・・・男か・・・

俺がそうがっかりしているとその男が心配したように話しかけてきた

「あの？何かありました？」

「いや、大丈夫だ」

「それならいいんですが」

自己紹介がまだでしたね。僕は秋宮 隼人です」

「ああ俺は・・・」

「3年A組？ウチもだよーよろしくね！

ウチは候 美華だよ」

「ああよろしくな」

「それにしてもすごいね」

「ん？何が？」

「ここにある天和 京介って言う人」

「確かにすごいですね、全てにおいて学年次席に圧倒的な差をつけていますからね」

「あこがれるな」

「いったいどんな人なんでしょうかね、気になりますね」

「稀代の天才と呼ばれているくらいですからね」

「ものすごい紳士だったりして」

「うちらじゃ使えないすごい魔法とか使っただろうな」

「なんと言っても文武両道だなんてすごいですよね」

「そんなにすごい奴じゃないぞ」

俺はそんなことを言っている二人に落ち着けというように言い放った

「えゝそうなんですか？」

「そうだよ」

「とりあえず教室に行くぞこのままだと遅れる」

「確かにそうね、急ぎましょう」

+ + +

「とりあえずクラスも変わったことだし自己紹介でもするか！」
教師の声がクラスに響いた

元気のいい教師のようで正直いつての苦手なタイプだ

「自己紹介か・・・」

「ではまず出席番号一番の秋宮からだ」

「はい」

俺の前に座っていた秋宮が自己紹介を始める

…次は俺のばんか…

教師に目をつけられるわけにも行かないのでここはいかにも優等生っぽく

「天和 京介です。好きなことは読書です。皆さん気軽に声をかけてください」

瞬間、クラス中から歓声が上がる

「あれが学年主席か」

「意外〜!!!」

「学年主席に見えない〜」

嬉しい様な嬉しくない様な・・・

とりあえず笑顔を向けておく

「次は学級委員長を決めたいと思うが誰か立候補か推薦はないか？」
「推薦します！天和君がいいと思います！」
「私もです」

「俺は断固拒否します！」

俺なんかに学級委員長なんて無理に決まっている代わりにできそうな人はいないかな

俺は回りに目をやって委員長ができそうな奴を探した
・・・いた

去年の学級委員長クラルヴァインだ

「俺はクラルヴァインを推薦します！！」

「彼なら学級委員長の経験があり適任だと考えます」

俺はクラス中に響くような大声で叫んだ

「なるほどな・・・だったら・・・」

先生も納得したようだ

ふう、これで俺が学級委員長になることはないだろう

「僕ですか・・・」

クラルヴァインが何か言っているが無視しよう

すまないこれも俺の平和な学生生活のためだ。許してくれ

+ + + +

「京介くん」

「ん？」

「なんで学級委員長やらないの？」

「学級委員長になると大変だから」

「えゝ普通はクラスで一番強い人になるんじゃないの？」

「おれにはまとめる実力なんてないからな」

「京介くんは去年から変わってないね」

「お前もなw」

「まあ頑張ってみるよ」

「クラス間戦争負けるなよ」

「うん」

クラス間戦争というのはAクラスならAクラスの1〜7年生が協力して他のクラスと戦うというものだ、勝利条件は他のクラスの学級委員長を全員倒すこと。敗北条件は味方の学級委員長が全員やられることだ

このクラス間戦争で勝ったクラスは魔具の配布、使用許可や勲章がもらえたりと得することはかりだ逆に負けたクラスはひどい補習と肉体労働が待っている

なので全クラスで年2回におこなわれるクラス別戦争で負けないように学級委員長にはクラスで一番強いものになっている

しかしこのクラスの場合は少し違った

学年主席と学年三席がいるからだ

普通学級委員長は負けたらいけないので単独行動及び不正をなくすために居場所が強制的に知らされる。なので京介は居場所が知らされる学級委員になることを断ったのだ

「そういえば今回の件で魔具もらったんでしょ？見せてよ」

「いいぞ」

この学院では成績上位10名に専用の魔具が渡される

魔具というのは魔法の武器の事で学院ではそれを装飾品にしてい

も身につけている
俺の場合は腕輪だ

…腕輪に魔力をこめる

さっきまで何もなかった俺の手に刀が握られる

「すごいね、刀か」

クラルヴァインがこつちを覗き込んだ

しかし教室の中で魔具を発動させてよかったのだろうか？

「クラルのも見せるよ」

「いいよ」

クラルヴァインの手に剣が握られる

細さからしてレイピアだろう

「やっぱり専用の魔具があるとかっこいいね」

クラルヴァインが笑っている

「そうだな」

そんな話をしていたらもうあたりはかなり暗くなっていた

「もう暗いね」

「そうだな」

「お前は寮だっけ」

「そうだよ」

「俺は外だから別だな」

「うん、じゃあね」

「ああじゃあな」

俺はクラルヴァインに別れを告げて走り出した

第二話

生徒会執行部

それは全校生徒の代表であり生徒を導く由緒ある会

だからこそ品行方正、学力優秀なエリートが集まるところであり全校生徒の注目の的であった。生徒会執行部に所属しているというだけで羨ましがれ、尊敬の眼差しを受ける。それほどまでにこの学校の生徒会執行部は人気があった

今俺の手元には一枚の書類、あて先は生徒会執行部、内容は……

『天和京介を生徒会執行部に任命する』

そう一行だけ書いてあった……

「すごいな〜京介、生徒会か〜」

今俺に話しかけた男の名前はメイクス・フェルナント耳がよくすぐいろんな情報にかじりつく今だって教室の端にいたくせにここまで来ている

「えっ、それは本当かい京介くん？」

このいかにも優しそうな声は学級委員長のクラルヴァイン・ジークムントだ。ヨーロッパの有名な貴族の子らしいが俺らに対してえらそうな態度をとるわけでもないとてもいい奴だ。

「生徒会だと！」

「それは本当か！」

しかしいかんせんこのクラスの連中は耳が良すぎるようだ。一瞬で俺の机の周りはクラスの仲間でいっぱいになった。

「すごいね〜」

「まあ天和だったら当然か」

「疑う余地もないな」

「天和くんは頭いいからね」

みんなが言うことは間違っていないなぜなら俺はクラス分けテストで学年主席という実力を持っている。実技だって学年1位だし、学園内でE〜SSまでランク付けされている中でA-と高位のランクを保持している

だからこそこの報告に驚きはしたが疑うつもりはない
しかしいきなり3年生にこんな書類がくるだろうか？普通はこないだろう

しかもあの生徒会執行部からだ。何か裏があるんじゃないのかと当然思ってしまう

これは罠で俺を貶めるつもりかもしれない

「そういえば京介くんは生徒会室の場所知ってる？」

そのクラルヴァインの問いに京介は思い出したように反応した

「そういえば知らないな」

「だったら放課後一緒にいこうか、ちょうど渡すべき書類があるし」

「ああ、頼むよ」

本当にクラルヴァインは優しいなあ、これで女だったら本当によかつたのに……

+ + + +

放課後

俺らは二人で生徒会室の前にいた

「失礼します。三年A組学級委員長ジークムントです。書類を渡しに来ました」

「どうぞ、お入りください」

そういつてクラルは生徒会室に入っていた

俺もこれに続く

「三年A組の天和です。生徒会から書類が来たので来ました」
中に入る

広い、とにかく広い、生徒会室というのだから俺らの教室ぐらいの
大きさだと思っていたが教室二個分以上はあった

「ああ君がああの三年生でランクA-の天才か」
背の高い優しそうな男が話しかけてきた

「ああ名乗りが遅れたな生徒会副会長のデュートリヒだ、よろしく
な」

その男は優しそうな笑顔をこちらに向けてきた、俺がいきなり話し
かけた来たこの男が信用にたるかどうか考えていると、

「私はコンティーン・リボン、デュートリヒの恋人よろしくね」

「そんなこと俺がいつ言っただ？」

「言っただよデュートリヒのバカ！」

横からラブコメみたいなのが繰り広げられたのでどうでもよくなった
あの先輩が信用におけるかなどもうどうでもいい。俺は他人の異性
交遊にかんしては許さない方針を持っているの、だから今は…
この先輩をどうやって殺すのかをフルで考えていた！

「…それ以上いちゃつくのはやめろ。それ以上すると殺す…」

そんな俺の気持ちを代弁したかの様に急に話し出したのは今まで奥
にいた人だ

この人はさっきのデュートリヒと比べると落ち着いていてどちらか
というと草食系といった感じだ

「…彼も困っている」

「ああそうだったな、すまない」

「…自己紹介がまだだった、生徒会庶務のヴィルヘルム・セイデリ

ア」

「じゃあ、みんなで自己紹介しようか」

今度は元気そうな女の人が近づいてきた

「僕は生徒会書記のティーナ・オリーベです」

僕っ娘のようだ

「よろしく願います」

こんどはいかにもお嬢様のような人だ。・・・僕っ娘なのに

「わたくしは生徒会議長のジャンナ・ファレビアよ、いい顔してるわね、私の召使にならないかしら？」

この人は逆に女王さまみたいだな

「…いきなり何を言い出しておるのだ！」

一番奥にいた男が怒鳴った

「え…いいじゃないの別に」

「あなたには関係ないのだから」

「関係あるもないも吾輩が生徒会長代理をしている間はどんな不祥事も起こらせん！」

「あいかわらずうるさいわね」この頭でっかちは

「頭でっかちとは何か吾輩は正論を述べたまでだ！」

「はいはいそうですわね」

「ぐぬぬ……」

「…デュークそれより自己紹介」

「そうだったな吾輩が生徒会長代理デューク・ウェルキンスである」

「諸事情により生徒会代理という役職についておるよろしく頼む」

「はい、よろしくお願いします」

よかった、破天荒な生徒会執行部だがまともな人がいたようだ

「残りのものは今で払っておる。後日紹介しよう」

まだいるのか・・・

できればまともな人だといいな

「まあ君もいきなり生徒会執行部に任命するといわれても驚いておるだろう」

はい、そうですね、生徒会執行部の面子が想像より破天荒で大変驚いております

「君を生徒会執行部に任命した理由は簡単だ」

この人よく見たらすごいいいイスに座ってないか？

「君がいいと生徒会の人が推薦したからだ」

よく見ると他の人だっていいイスいい机なんだかい設備だな、これが生徒会執行部か

確かにすごいな

「おい！話を聞いておるのか？」

うん？ああ話を全然聞いていなかったなさっきなんていったっけ生徒会員からの推薦？そりゃすごいな、うんすごい・・・って俺！？俺が推薦された？誰に？

「推薦っていったい誰が！？・・・ですか」

「推薦した人は君を知っているらしい」

知り合い・・・か生徒会に知り合い？居たかなあ？思い当たる節がない

「名前はアリス・レーヴァティンというのだが」

「アリス・レーヴァティンってオーストリアの？」

「ああ彼女は確かにオーストリアの生徒である」

・・・思い当たる節があった・・・俺と一緒に住んでいるラインの
幼馴染だ

俺も何回かあったことがある

あの人か・・・まさか生徒会に入っているとは・・・
「どうだ知っているか？」

「はい知っています」

しかし何で俺を推薦したんだ？訳が分からない

「お前とあいつの関係はどうなのだ？」

「たんなる知り合いです」

「そうか、ならばいいのだ」

デュークはほっとしたように言った

この人は何が聞きたかったのだろうか？まあ俺にはどうでもいいこ
とだ

「そうですか・・・」

俺はそう適当に返事をした

「君の役職は生徒会会計だ、これからよろしく頼むぞ」

「は、はい」

なんだろう、この人の言うことには何故だか逆らえない

こうして俺の普通ではない生活が始まった

第三話（前書き）

教室の位置を替えました

第三話

チチチチ・・・

美しい鳥の声が聞こえ

透き通った朝日が窓から差し込んでくる

ああなんていい朝なんだろう

どれぐらいいいかというと

このまま死んでもいいぐらいだ・・・いや死にたくないけどね
ああこのままずっと寝ていたい・・・

つとそんなことは言ってられないので起きなければ・・・
ガタン

・・・ん？何かに当たった？

ああ時計か・・・元に戻さなければ・・・

・・・ん？さつき変なものを見たような？

いや、気のせいだろう、なんせそんなことあるわけがない
まあ一応気になるしもう一度見てみようかな・・・

・・・

おかしいな寝ぼけているのかな？

もう一度見てみよう

・・・

だめだ何度見ても変わらない。これは受け止めるしかないようだ
・・・現在時刻8時5分・・・

遅刻だ！！・・・普通の人だとまだ間に合うかもしれないが俺の場合
は昼飯を作らなければならぬ。したがってこの時間に起きたと
いうことはやばいのだ

まさか俺がこんなミスをするなんて………そういえばラインも起こさなければいけないな………疲れる……

……と俺が一階に下りると

そこには一人の女性がいた

「アリス……」

俺がそう名前を言った瞬間……

ドガ!!

フライパンが飛んできた……

……ん?……俺は気を失っていたようだ

「起きなさい!遅刻するわよ!」

近くでアリスの声が聞こえる

俺を気絶させた張本人の声が……

「……起きないなら殴るわよ」

「お前が気絶させたんじゃないか!!」

俺はまだ痛い頭を抑えながら叫んだ

この女俺起こしたいのか寝させたいのかどっちなんだ
ああ恐ろしい

「なんだ無事じゃないの、びつくりさせないでよ」

なんだ心配してくれていたのかそれはよかった

「とりあえず無事ならさっさと起きて」

ん?そういうえ俺はいまどうなっているんだ?

さっきは頭がかすんでよく見えなかったがこれはよく見たら

膝枕か!!

なんてこった膝枕なんてものを生きてるうちに体験できるなんて
学校に早く行きたいがここもどきたくない

迷うな俺、どうする？

？ 極限までこの状態で居る

？ このままここで一日を過ごす

？ ここからもっと違うことを・・・

待て待て俺、何を考えているんだ

俺は健全な学生でもっとしっかりした奴のはずだ
もっとしっかり考えるんだ

普通は上を見上げるだろ！

ガチャ・・・

いきなり目の前の扉が開いた

はて？俺の家に俺以外に誰か住んでいただろうか？
誰も住んでいないはず・・・

「京介、アリスなにしてる？」

いや・・・いた居候のラインだ・・・

「いやいやライン何もないわ！！」

がつん

俺の頭が思い切り床を打つ

アリスが足をどけたからだ

ラインめ、俺の天国を邪魔しやがって

ぶん殴ってやる

なんて変なことを考えていると本当に遅れるので俺は急ぎ足で家を出ることにした

これじゃあ昼飯なんて作ってられないな

「ライン！昼飯は購買で買えよ」

「ああそれなら弁当作ったよ」

「どうやらアリスが作っていたようだ」

「これはありがたい」

「あと京介の分も」

俺の分もあるのかこれは嬉しいな

まあしかし何故アリスがうちにいて弁当を作っているのか気にはなるが今はいちいち聞いている暇がないので俺は走り出した

+ + + +

「間に合った…」

肩で息をきりながら時計を見ると

8時25分どうやら間に合ったようだ

急いで教室に向かった

+ + + +

がらがらがら

教室の扉を開けると皆が一斉にこっちを向いて…

俺の顔を見た瞬間…

…舌打ちをしてきた

「なんだ天和かよ」

「天和か」

ところでクラスメイトのがっかりしたような声が聞こえてきた

…涙が出てきた…

俺何かした？何もしてないよね？

それにしても何かあったのだろうか？

とりあえず近くに寄ってきたクラルを捕まえて話を聞く

「これは何の騒ぎだ？」

「転校生が来るらしいんだ」

なんだ、そういうことか…相変わらずそういう情報だけは早いなこのクラスは…

しかしこのタイミングで転校というのは微妙だな

今日で進級してから三日目だ

普通なら進級初日か次の日ぐらいだろう

まあ俺も詳しくないからよく分からないがそれに転校生なんてどうでもいいし…

「おい聞いたか？」

「聞いた聞いた、転校生は女子なんだろ」

…前言撤回！その転校生には興味がある！ぜひと顔が見たいものだおつと俺は顔だけで人を判断するようなアホじゃないぜ

ただブスと可愛い子だとしても可愛い子に優しくなるといいうか反応してしまうというか

いや顔だけじゃないからね！ほんとに！

いやゝ朝のホームルームが待ちきれないなゝ

+ + + +

待ちにまつた朝のホームルーム

担任の長つたるい前置きなど誰一人聞いておらず担任に呼ばれて教室に入ってきた女子に皆はくぎ付だった

「自己紹介してもらおうか」

「初めまして皇聖院 凜《こうせい いん りん》と申します

宜しく願います」

なんて上品な声なんだ

その声を聴いているだけで癒されるそんな甘い声で彼女はしゃべった

「皇聖院はお隣の竹長学園から転校してきた、みんな仲良くやれよ」
相変わらずこいつは大声で五月蠅いな

しかしその隣で担任の声に怯えたように肩を震わせている姿が何とも可愛らしい

しかし竹長学園か…

竹長学園はこの桜ノ宮市に存在している魔法学校の中でもここに（ウェールズ学院）続いて大きな学校だ

しかもあつちはこのつちとは違い貴族ばかりのお嬢様学校のはずだ（共学だから正確にはお嬢様ではないが…）

こつちは魔法さえ使えばいいからいろんな奴がいる
大丈夫かな…？

+ + +

朝のホームルームが終わると転校生の席はクラスメイトでいっぱいだった

まったく暇なもんだ…

「ねえねえ皇聖院さんって竹長学院から来たんでしょ」

「ねえねえ好きなことになに？」

「スポーツは好き？」

「スリーサイズは？」

見る限り転校生は困ったようにしている

あいつら……俺も気になる……って違う違う

いきなり皆から質問されてすぐ返答できるわけないだろ…

あの子は聖徳太子じゃないんだから…

迷惑かけてるんじゃないのか？

よし今から奴らの仲間に入れてもらう……じゃない奴らに質問のしすぎはいけないと注意してこよう

…別に転校生に興味があつてお近づきになりたいな…とかいう下心があるわけではない

これはれっきとした生徒会執行部の仕事なのだ

「好きな事は読書です。スポーツもある程度は出来ます

スリーサイズは…」

くはあ…

俺は鼻血が出そうになった鼻を一生懸命押さえた
どうやら俺には早かったようだ

この転校生人がいいのか質問にすべて答えている
そう…全部だ…変な質問まで…

まさかこんな人がいるなんて驚きだぜ

俺がそんな事をしている不意に彼女がこっちを向いた
そして俺の状況を見て気遣ったように言った

「あら？…大丈夫ですか？」

「大丈夫です。気にしないでください」

俺は鼻血を必死に抑えながら言った

まさかこんな恥ずかしい姿を見られるとは
しかし見ず知らずの俺を心配してくれるとは優しいなこの子
ピュー！

いかん！興奮したら鼻血が

「ぐああああああ！」

早く止めねば落ちて着け俺心頭滅却するんだ
違うことを考えるんだ

…だめだ頭から離れない、どうして俺はこうなんだ…
ピュー！

「ここまでか…」

「ふふふ面白いお方ですね♪」

「ほえ？」

いかん！いきなり予想もしていなかったことを言われてつい変な言
葉を行ってしまった…

「いえ、何でもありませんの」

「私の名前は凜ですわ」

「貴方のお名前は？」

「俺の名前は天和 京介だ」

「京介さんですねわかりました」

「ひとつお願いがありました」

「聞いてくれますか？」

「ん？なに？」

「こんな女の子が俺にお願いってなんだろう？」

「ん？…全然思いつかないな…」

「私にこの学院を案内してくださりませんか？」

「いいよ、むしろ喜んで！」

「なんてこった」

「考えるよりも先に口が出てしまった」

「まあこんな可愛い子からの頼みだ、断る奴なんてこの世にはいないだろう」

「本当にございますか！？…でしたら放課後をお願いしますわ」

「ああ、わかったよ」

「話を聞く限りは二人かな」

「だとしたらデートってことになるんじゃないのか？」

「大丈夫か？俺」

「絶対にへまは出来ないな…」

「…しかし紹介するといつても俺そこまで詳しくないし…
クラルに手伝ってもらうか…」

+ + + +

ようやく放課後か…

今日ほど一日が長いと思った日はないぞ

…しかし今日は大変だった…

朝からあんなことを言われたら放課後が待ち遠しくて

授業を一切聞いていなかった

まあ俺なら少しくらい聞いていなくても大丈夫…だと思う

…と俺が一人でぶつぶつ言っていると彼女が荷物をまとめてやってきた

「京介さん、行きましょう」

「うん、行こうか」

まるで俺は初デートの様に緊張していた

この学校はA棟B棟がありA棟が特別教室などがありB棟は普通の教室がある

ちなみにA棟は十字架のような形をしている

B棟は長方形の形だ

まず一階から…

A棟の一階は保健委員の本拠地保健室のほかに職員室など学校の主要な施設が集まっている

「B棟のは他学年の教室ばかりだからやめておこうか」

「はい」

B棟は一階が7年生の教室、二階が6、5年生の教室、三階が4、

3年生の教室、四階が2、1年生の教室だ

「次は二階だね」

「二階…」

A棟の二階は図書委員の本拠地図書室、環境委員の本拠地学院管理室、広報委員の本拠地広報室や放送室がある。主な特別教室もここにある

「三階…」

俺はいまだ三階には来たことがなかった
だから今若干ワクワクしている

…俺は子供か…

とりあえず三階に何があるかはクラルから聞いていたので知っていた
A棟の三階は風紀委員の本拠地風紀委員執務室がある。他にもいろいろな部の部室もあるらしい

30

とりあえず三階の入った

すると一気に話し声が聞こえた

五月蠅いと思ったが今は放課後、部室で部活に精を出しているのだ
ろう

それを邪魔するのは悪い、しかも相手は上級生かもしれないからな…

ガヤガヤ

ガヤガヤ

しかしうるさいな

なにかやっているのかな？

とりあえず声のする方に行ってみることにした
すると…

ガッシャーン！

一際大きな音が廊下に鳴り響いた
さっきのは明らかにおかしい音だ

まさか本当に何かあったのかもしれない

「何の音でしょうか？」

「分からない…でも何かあったみたいだからちょっといてくるから

皇聖院さんはそこで待っててね」

そう言つて皇聖院をそこに置いて、俺は急ぎ足で歩きだした

さっきの音は確かあの曲がり角の先でしたはずだ

角を曲がつてその先を見るとそこには…

第四話

角を曲がってみるとその先を見るとそこには・・・

人だかりがあつた

「やっぱり事件か・・・」

俺はため息まじりにそう言うと、持っていた生徒会の腕章を腕にはめた

「生徒会です。どいてください」

そう言いながら人だかりを、かき分けるとそこには二人の男が居た
一方は地面に倒れていて、もう一方はそれを見て何かしているようだ

「Teufelswerkzeug? ffnung・・・」

立っている男がつぶやいた

髪の色は金色、碧眼で細目だから・・・この人はゲルマン系かな・・・

・

この学校に生徒を出している国は、ゲルマン系だとドイツ、オーストリアぐらいだったはずだ

だから今この人がしゃべったのは・・・

ドイツ語かオーストリア語のはずだ

俺はドイツ語ぐらいなら話せなくても意味ぐらいならわかる

二国とも近いから意味は似ているはずだ・・・

だから、さっきのを、日本語に訳すと・・・

やばい！

止めなければ、いけないだろう・・・これは
なんとってあれを日本語訳すると

【魔具発動】・・・なんだから

「その生徒止めるんだ！」

廊下いっぱいに聞こえるように叫ぶ

いかに外国人といっても日本の学校に来るぐらいだ
日本語ぐらいはわかるだろう

「邪魔しないでいただきたい」

その生徒から予想外の返答が返ってきた・・・

「生徒会執行部だ！いますぐ魔具をしまいなさい」

しかしなんでこの人魔具を持っているんだ？

頭が良いわけでもないだろうし

・・・なぜ俺がこう判断したかはまた後で・・・

「これは風紀委員の治安維持活動の一環だ。生徒会は関係ない」

そうか・・・風紀委員だから魔具を持っているのか・・・

風紀委員には風紀を守るための実戦力として風紀委員専用の魔具が
配られる

風紀委員の専用魔具はトンファーだ

まるでヒバリさんみたいだな・・・

「関係無くは無い。迷惑がかかるだろ」

「そうか、それは失礼した・・・」

なんだわかってくれたのか・・・
それなら一安心だ。

「・・・では迷惑がかからないようにやる」

「そういうことではない！」

なんだこの人

これがお国の違いって奴か？

「ではどうしろというんだ？」

「とりあえず武器を収めるんだ」

「それはできない。なぜなら我々は風紀委員、学校の治安を守るものだ。」

目の前で風紀を乱すものがいて、それを見逃すことはできない」

確かにそうだが・・・

これはひどすぎる

今この男は、殴られまくったのかぼろ雑巾のようになった男をいじめ
ているだけだ

「お前がやっているのは弱いものいじめだ！見過ごすわけには行かないだろ」

「そもそも風紀委員は生徒会執行部と同列だ。命令を聞くことなど
無い

それにお前、上級生には敬語を使え」

この学校は学年ごとに校章の色が違う

校章の色は

1年は黄色、2年は青、3年は赤、4年は白、5年は黒、6年は桜、
7年は金

というようになっている

よく見ると相手の校章は白色だ

ということは相手は4年、年上だ・・・

「すいませんでした！！でもこういう場面で敬語は使うとおかしいと思います！！」

「わかればいいんだ。じゃあな」

「いやいや・・・その人をこっちに渡してください」

「だめだ、俺の任務はこいつに制裁を加える事と懲罰房に連れて行くことだ」

「その人が何をしたんですか」

「校則を破った。それだけだ」

そんなことでここまでぼろぼろにされるなんておかしい
どうにかしなければ

「でも・・・」

「しつこいな・・・、ならば実力で奪ってみろ」

実力・・・か

相手がいくら上級生だとしても俺は学年主席だ、負けることは無い
だろう

でも・・・わざわざ知らない人のためにするか？
しないよな・・・

考えている間に風紀委員が生徒を連れて行く

・・・考えている暇は無いようだ・・・

腕輪に力をこめる

「唸れ魔具われに示せ伝説の力!!」

腕に剣が現れる

「・・・すごいな・・・」

あいてが俺を見て驚いている何かあったか？

まあいい今は相手を倒すことに集中するんだ

どうしようか相手は上級生で風紀委員だ

実戦経験は豊富だろう

ならばここはやはり・・・

「うおおおおおおお!!」

・・・突進だ

「突進か素人だな」

・・・しかしただの突進ではありません

ここは魔法学校です、ということは・・・

お待たせしました、魔法です!

「来たれ風の妖精よ我にあだなす者を切り裂け」

俺の右手から風魔法が放たれる

わざわざ詠唱しなければ使えないなど魔法は不思議だ

一応は詠唱することにより術者に使用する魔法を想像しやすくする、
ということらしいが・・・

まあ科学では判明できないことばかりだ

「魔法か・・・やるな・・・」

俺が放った魔法は広範囲を覆う魔法だ

それを相手の後ろにやる

これで相手は後ろに下がれない

ならば後は追い込むだけだ

やはりこうなったら肉弾戦ですよ

「これで逃げ場はなしだ行くぞ!!」

「・・・来たれ水の精霊よ我にあだなすものを呑み込め」

水魔法、しかも精霊だとやばい!!

「来たれ土の妖精よ我を守る盾となれ」

とりあえず土魔法で防・・・防げないか・・・

俺が出した土の盾は目の前でどろどろと消えていく
どうしようか・・・

魔法勝負だったら負けるな・・・

しょうがない接近戦に持ち込むか・・・

「来たれ水の妖精よ我にあだなす者を呑み込め!」

俺は相手に向かって水魔法を放った

・・・相手の目に向かって

「目があああ!目があああ!!」

よし!狙い通りだ

水魔法で相手の目をくらましたら

俺はそのまま突進した

「くらええええ!!」

相手の腹に向かって刀を振り上げる

魔具は相手に致命傷を与えることは無い

斬られても痛みが体に走るぐらいだ

だから力の限り相手を切っても大丈夫だ

俺の刀は相手の体を一刀両断!・・・できないのですり抜ける・・・

相手はあまりの痛みに腹を抱えている

しかしさすがは風紀委員すぐに立ち上がり俺に攻撃を仕掛けてくる

「下級生だからと優しくしてやったら調子に乗りやがって」

・・・？この人性格変わってね？さっきまでと言葉遣いが違うよう
な・・・

「来たれ水の精霊！！我にあだなすものを飲み込めええ！！」

目の前にでかい水の球体が現れる

これはこの人の全力だろうか・・・

廊下を覆うぐらいの球体が俺に襲い掛かる

やばい・・・このままだとやられる

逃げるわけには行かないし・・・

どこかに助けてもらおうか・・・

ここは三階だ、あるのは風紀委員の執務室といろいろな部活の部室だ
風紀委員は助けてくれないだろう・・・

ならば部活か・・・

だったら無理だろう

やっぱり自力でやるしかないか・・・

水と対関係にあるのは火だから

「来たれ火の妖精よ、私の呼びかけに答え、我にあだなす者に妖精
の炎を見せん、

爆ぜろ！イグニス！」

少し長めの詠唱だ、これで少しは魔法の威力も上がるだろう
いくら相手の魔法の方が強いといってもこれなら・・・

「き、来たれ水の妖精よ、わ、私にあだなす者を呑み込め」

・・・ん？目の前にある風紀委員以外の人の声がしたぞ

いったい誰だろう？この声聞いたことあるんだが・・・

「ま、まで、お前そんな至近距離で・・・
ぐわあああああ！！」

風紀委員の悲鳴が聞こえた・・・
それと同時に目の前にあった水の壁が消えた

そこには魔法を至近距離から喰らって倒れている風紀委員と

「大丈夫でしたか？」

・・・皇聖院がいた・・・
「皇聖院どうしてここに！？」

「京介さんの詠唱が聞こえまして、何事かと思い、いってみれば
このお方が魔法を使っておられたので倒させていただきました
だめでしたか？」

「いや大丈夫だよ、問題ない・・・」
・・・倒すって・・・確実に敵かわからない奴を攻撃するか？
この人、結構危ないな・・・

「おいおい大丈夫な訳ないだろ。風紀委員に手を出したんだぞ」
後ろから声がした
・・・そうですよね

風紀委員に手を出してただで済むわけがない・・・
「っていきなり話に入ってくるな！！」
振り返るとそこにはラインがいた

「とりあえず二人とも急いで生徒会室に行ったほうがいい

ここに居ると他の風紀委員に気付かれるぞ
生徒会室なら風紀委員会でも入ってはこれないからな」

「そ、そうかわかった、お前はとうするんだ？」

「俺は行く理由がないが後で行こう、その方がいいようだ」

「そうか、じゃあまた後でな」

俺は近くに倒れているぼろ雑巾みたいになった生徒を持って生徒会室に向かった

「さっきの御方は誰ですか？」

「ああ、あいつはラインだ。ライン・ギルベルト。俺の親友だよ」

「そうでしたか、では急ぎましょう」

「ああ、急ごう」

そういつて俺と皇聖院は走るスピードを上げた

生徒会室は3階だから、そこまで遠くではないんだけど・・・

第五話

俺たちは滑り込むように生徒会室に入る

「ん．．．？いきなりなんだ？」

「あらあら．．．」

「．．．騒がしいぞ」

生徒会室に入るとそこに居た全員が驚いたようにこつちを振り返った

「あ．．．すいません」

肩で息を切りながら返事をする

「おい．．．大丈夫か？」

デュートリヒさんが心配したように話しかけてくる

「だ、大丈夫です」

息を整えたら一度生徒会室を見回す

見る限りだと生徒会室には、4人の人が居た

デュートリヒさんとヴィルヘルムさん、そしてティーナさん

そして知らない女性だ

背の高さからして年下かな？

「デュートリヒさんあの人は誰ですか？」

「ああ、あいつは生徒会会計のルイ・メイエだ

あと背が小さいせいで間違われるが4年生だ」

「．．．四年生！？驚きだ、まさか年上とは．．．」

「一言多いわよ．．．あとその3年生！まさか私と年下として見たりしてないでしょうね？」

この人俺の心が読めるんだろうか．．．

すっかり思ってますよ

しかし年下にしか見えない

そんなことは置いておいて生徒会長代理が見当たらない、どうしたんだろう？

「あのく？生徒会長は？」

「生徒会長なら学院長のところに行っている何か用があつたか？」

「実は・・・」

「それとその娘は誰だ？」

本当は生徒会長代理に話すのがいいのだろうが今居ないのなら副会長に聞いてもらうしかないだろう

「話すと長いことになるんですが・・・」

俺はついさつきできたことを説明した・・・

「まったく・・・お前達は・・・やってくれたな」

生徒会室にため息がながれる・・・

「すいません」

「風紀委員に手を出したのか・・・」

「面倒くさいことになる・・・」

ヴィルヘルムさんも話しに加わる

「いったいどうするの？」

ルイさんが心配そうに話してくる

「やはりここは生徒会執行部を全員集めるべきでは？」

ティーナさんは落ち着いた表情で話している

「執行部全員か・・・外に行っているクルトを呼び戻さなければなら・・・」

「・・・あいつは別にいいのでは？」

「あいつ結構強いから戦力にはなるしね」

「皆さん戦う気満々じゃないですか」

皇聖院さんが止めに入る

このまま行ったら戦いをしそうな勢いだっとな

まあ原因は俺にあるんだが・・・

「・・・俺はこれから生徒会執行部のメンバーを集めてくる」

そいつってヴィルヘルムさんが生徒会室を出て行った

それと同時に生徒会室のドアが開いた

「失礼します。4年B組のギルベルトです。用事があってきました」
ラインだ・・・

「すまない、京介関係悪化は免れない・・・。副会長!!」
「なんだ？」

「風紀委員は戦闘準備を整えています。生徒会と一戦交えるつもりでしょう」

「それは本当か!？」

「はい、実際に環境委員との不可侵締結も記録に残っています」

「そうか・・・それは厄介だ。ではこっちもどうにかしなければな・・・」

やばい・・・話についていけない、いったいどういうことだ？

俺がそんな疑問を浮かべていると

それに気付いたのかティーナさんが説明してくれた

「この学校にはね委員会対抗戦争というクラス間戦争と似たようなものがあつてね

それをして負けた委員会は勝った委員会の言うことを聞かなきゃいけないし、序列も下がるんですの」

なるほど、だから風紀委員は目の上のたんこぶのように邪魔な生徒会を委員会間戦争で負かして言うことを聞かせようというわけか・

・
「委員会の序列は1位生徒会・風紀委員会、2位図書委員会、3位保健委員会、4位広報委員、5位が環境委員ですの、環境委員は先の委員会間戦争で風紀委員に負けたから風紀委員の言うことには絶対に従つての」

そうゆうことかようやく理解した・・・だから環境委員は風紀委員と不可侵を結んだ訳か・・・

しかし生徒会執行部は全員合わせてもたった10人程度（各委員長、副委員長は除く）のはずだ・・・

風紀委員と戦つて勝てるとは思えないのだが・・・

「生徒会執行部は人数少ないですよ、勝てるんですか？」

「そこが問題なんですよ。前ならば会長がいたから大丈夫でしたが今回は代表が居ませんからね・・・どこかに援軍を頼むんだと思いますよ」

援軍か・・・生徒会執行部と特に仲がいい委員会などはあるのだろうか？

ガラララ

二人で話しているとドアが急に開いた

「コンティニュー・リボン、ただいま戻りました！！」

コンテイー又さんが戻ってきたようだ

「あれ？みなさん何かありました？」

俺たちはコンテイー又さんに事情を説明した

「へー、そんなことがあったんだ。大変だね」

この人は相変わらずのんきだな

「だからお前には保健委員会に共同戦線をはる約束を結んできてくれ」

「了解だよ」

そういうとコンテイー又さんは目にも留まらぬ速さで生徒会室を出て行った・・・

本当にデュートリヒさんの事となるとすごい力を発揮する人だな・・・

・

「これで後戻りはできなくなったな・・・」

デュートリヒさんがつぶやく

「会長代理になんて説明しようか・・・」

見る見るデュートリヒさんの顔が青くなる・・・

ガラララララ

また扉が開く音がした

俺が扉の方を見ると

そこには・・・

顔全体に怒りを宿した・・・

・・・生徒会長代理がいた・・・

「お前たち何を勝手にしておるのだ！」

生徒会長代理の怒声が生徒会室に響く

「まあ代理、落ち着いて」

そんな生徒会長代理をデュートリヒさんがなだめる

しかし生徒会長代理改めデュークさんの怒りは当分収まりそうに無い・・・

「ここで成果をあげれば代理の評判も上がりますし、兼ねてから問題だった風紀委員との衝突もなくなるでしょう。一石二鳥だろ」

「そうか・・・それなら、まあ・・・」

・・・と思っていたんだが、デュークさんはデュートリヒさんに乗せられて乗り気になってしまったようだ

ガラララ

また扉が開く

「ただいま戻りましてよ」

ジャンナさんが帰ってきたようだ

「話はもう聞きましたわ、それでどこが味方になりそうで、敵になりそうか教えてくださる？」

ジャンナさんは生徒会室に入るとすぐ情報収集を始めた

俺は話しに入れそうにないので、同じように話しに入れずイスに座っている皇聖院の元に行く

「いったいどうなるんだろうね？」

「私のせいで申し訳ありません」

まだ謝っている。この人はやっぱりかわいいな・・・？

「天和！」

いきなり名前を呼ばれ驚いた様に振り返る
見るとコンテイーヌさんももう戻っていた・・・

「これからお前にも状況を確認してもらおう、こっちへ来い」
デュークさんが叫ぶ

・・・俺を呼んでいるようだ・・・

「状況が大体わかったぞ。今回の委員会間戦争はかなり大きな規模になりそうである、

我々側につくのが、保健委員と広報委員。風紀委員側に付くのが環境委員、図書委員だ

戦力としては、我々、執行部が16人、保健委員が55人、広報委員が43人だ

そして風紀委員側は、風紀委員が73人、環境委員が52人、図書委員が54人。

合計だと114人VS179人と不利だがこちらは精鋭の集まりである

量より質で勝負である」

「しかし執行部は全員がそろっていない・・・これでは勝てない」
ヴィルヘルムさんがやる前から負けを考えている

「早く全員を集めなければいけない・・・」

しかしデュートリヒさんはそうではないようだ

「でも皆いろいろな事しているからね・・・」

コンテイーヌさんにしてみれば珍しい少し否定的な意見だ

「集まるのは無理ではないでしょうか？」

ティーナさんもコンテイーヌさんと同じ意見のようだ・・・

「では今きていないのは誰だ？」

「・・・クルトとアリス、池上、あと坂上、それと篠原と榎本とクラリス・・・」

ヴィルヘルムさんは相変わらずしゃべるときは最短でしゃべるんだな・・・

「ふむ、では明日来れそうに無い奴は誰であるか？」

「篠原と榎本・・・池上と坂上がこれないと思う・・・」

「そうか・・・ならば今日はこれで終わりだ

しかし一応の危険も考え登下校時は二人以上で行動すること、以上!!」

そうして作戦会議は終わった

俺が終わったので生徒会室から出ようとすると

「おっと、待った」

コンテイーヌさんに止められた

「デュークが言っていた事を忘れたかい？二人一組で行動するんだよ」

そうだった二人以上で行動するんだった・・・

コンテイーヌさんはデュートリヒさんにくっついているし

ルイさんはティーナさんと一緒にいる

ヴィルヘルムさんとジャンナさんはどこかに行ってしまった様だし残っているのは・・・デュートさんだけか・・・

「フム、お前達だけでは不安だな・・・我輩が付いて行ってやろう」

「いや、いいですよ、二人で十分です」

「何を言っておる。相手は風紀委員だぞ、二人だけでは危ないだろう」

「はあ・・・」

俺は仕方なく皇聖院とデュートさんと帰ることになった・・・

+ + +

三人で町を歩いていく・・・

「暗いですね」

「まあ、長引いたからな・・・」

時計を見る

今の時刻は7時だ

「私の家は向こうですので、ここで分かりますわね、では
ここで皇聖院が分かれる

なんてこった、デュークさんと二人かよ・・・
話が続かない・・・

「明日から本格的に戦争の準備をしなければいけない」

「そうですね・・・」

「もう後戻りはできそうに無い、気を引き締めておけ」

「了解しました、がんばります」

しばらく歩き続けると家が見えてきた

「俺、家ここなんで帰りますね、また明日」

「ああ、また明日」

そう別れを告げると俺は家に入った

ドアの鍵が開いていたのでラインはもう帰っているのだろう
「帰ったぞ、ライン」

家全体に聞こえるであろう声で叫ぶ

・・・俺はおっさんか・・・

「おかえり」

すると聞きなれない声が返ってきた

・・・この声どこかで聞いた気がするんだが・・・
まさかあの人が家に居るわけないし・・・

・・・まさかね・・・

「遅かったわね」

リビングに入るとアリスが台所から出てきた

「やっぱアリスか・・・」

アリスはどうやら料理を作っているようだ

「何を作っているんだ？」

「あんた達三人の夕食」

「ああ、俺たち三人の夕食か・・・」
・・・ん？三人？

俺の家には俺とラインの二人しか居ないはずだ
あんた達と言っているのだからアリスを含んでいる訳ではないだろ
う・・・

「アリス、この家には俺とラインしかいないよ」

まさか知らない訳ではないと思うが一応言っておく

「ない言ってるの？そこにもう一人居るじゃない」

アリスがそう言っただけ俺の後ろを指差す

もう一人？俺はアリスが指差すほうを見ている

そこには・・・

昨日まで居なかった謎の人物が居た・・・

どうやらパソコンを使っているようだ

キーを打つスピードからかなりの熟練者だろう・・・

すごいな・・・よく聞けばカタカタという音が止まることなく響いているぞ

しかし・・・

「・・・誰？」

「言っでなかつたな、こいつの名前は浪川鳴海だ」
なみかわ　なるみ

ラインがいきなり話に入る

まったくこいつは普通に会話に入れないのか・・・

「ラインが説明したとおり浪川鳴海だ、一応お前のクラスメイトだ、よろしくな」

あれ？こんな人クラスにいたっけ？

普段自分のクラスなんて見ないから同級生の顔なんてほとんど覚えていなかった・・・

これは失態だな・・・

「とりあえず今日は風紀委員との戦争のために情報をまとめていたところだ」

そういつて鳴海は持っていたパソコンを俺の方に傾けた

「風紀委員で気を付けなければいけないのは三人、まず委員長の華欧軍日だろう」

この人は強いぞ・・・総合だと学年ランキング3位だが実技、戦闘に関しては学年1位で

6年生で学院内で2位の実力者だ、まあ普通考えて勝てないだろう・・・

二人目は副委員長のキャロライナ・ウィリクスだ。華欧には劣るがこちらもかなりの実力者だ。気をつけておけ

三人目は・・・まあいいか、夕飯ができたようだ」
確かにこの香ばしい匂いは夕食だ

「夕食できたわよ」

「では話は夕食を食べ終わってからにするか？」

「それがいいな、冷める前に食べなきゃな」
ラインの提案に俺はすぐさま乗った
手料理なんていつ振りだろう

+ + + +

夕飯を食べ終わるとまたさっきの話に戻った
「・・・あとは生徒会執行部だな」

「そうだな味方の戦力も知っておかなければな・・・」

「まあ簡単に言うと生徒会執行部のメンバーなら負けることは無い
だろう」

皆、猛者ばかりだから」

猛者・・・あの人たちが？そうは見えないが・・・

まあ生徒会執行部に選ばれてるんだ、それなりに強いだろう

「まあ、もう夜も遅い、もう寝よう」

浪川がそんなことを言い出した

「へ・・・？」

「ああ、言ってなかった。今日は天和の家に泊まらせてもらう
もうこんな時間だしな・・・」

たしかにもう外は真っ暗だろう

「それと、アリスも泊まるから・・・」

え・・・？アリスが？

「アリスが？」

「文句ある？もう夜も遅いし仕方ないでしょ」

まあこんな夜中に帰らすわけにも行かない

「まあ、仕方ないよね・・・」

「それに会長代理から一人にならないようにと言われたしね・・・」
そうだった

いつ風紀委員に襲われるかわからないから二人以上で行動するよう
にいわれたんだった・・・

しかしいくら風紀委員が乱暴だからっていきなり襲ってきたりする
だろうか？

そんなこと無いと思うんだが・・・
まあ、用心に越したことは無いが・・・

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

「もう寝るのか？普通はここからだろう」

「早いな・・・真のゲームタイムは今からだぞ」
なにか二人が言っていたが無視しよう

今日はいろんなことがあったな・・・

もう疲れた・・・

俺は吸い込まれるようにベットに入り
のび太君にも負けない速さで寝てしまった

第六話

・・・・・・・・・・・・・・・・

おい・・・・・・・・・・

おい、起きろ・・・・・・・・

・・・・・・・・？・・・・朝か・・・・・・・・

「ふああああ」

おおきな欠伸と共に体を起こす

そこには・・・・パソコン片手に目にクマをつけている男が二人いた・
・

一人は親友のライン、もう一人は昨日始めてあったクラスメイトの
浪川だ

この二人昨日俺が寝るときに「まだ早いぜ」・・・・みたいなことを
言っていたが

どうやら徹夜でパソコンをしていたようだ

「どうやらネットゲーをしていたら朝になっていたようだ・・・・」

「もう朝か・・・・」

この二人、なんて奴らだ

前、はまり込むとやめられなくなるとは聞いたことがあるが
朝になるのを気付かないなんてネットゲー恐るべし・・・・

しかし学校があるのに徹夜でゲームをするか？

「お前ら学校あるのに、よく徹夜とかするな・・・」

「侮るなよ、これぐらい日常茶飯事だ」

二人が誇らしげに話す

いや、ほめてないから・・・

学校の制服に着替えながら話す

「お前ら遅れるなよ・・・」

「別に遅れても構わない・・・」

ラインが着替えながら返事をする

着替えるスピードが速い

これは日々の寝坊の成果なのだろうか・・・

とりあえず階段を下りる

まだ時間に余裕はあるしゆっくりしていいだろう

階段を降り一階に行くと

ほのかにいい匂いがしてきた

匂いにつられてリビングに行くと机の上に料理が並ばれていた・・・

そして台所の奥には・・・

アリスがいた

・・・そういえばアリスも家に泊まっていたんだった・・・

「これは朝飯か？」

後からきたラインがアリスに聞く

「そうよ、今日は戦闘になる確率が高いからしっかり食べて頑張つてね」

勘違いしている人がいるかもしれないので説明しておこう

これは応援しているのではなく、ラインにも生徒会側の味方に付い

て戦え、と言っているのだ

「分かった、そういうことなら仕方が無い、我々も生徒会の味方として裏で工作をしてやろう」

我々？ということは浪川もやる気が・・・
意外と良い奴らばかりなんだな

こうして久しぶりにまともな朝食をとり
学校へ向かった・・・

+ + + +

学院の校門をくぐり玄関に入る

さすがにこの四人でいるときつい・・・

「あれが風紀委員長の華欧軍日だ」

そういつて浪川が指を指す

その先には陣羽織を羽織ったいかにも風紀を乱しているであろう人物がいた

「華欧は大の日本好きでいつも和を大事にしている」

あれは彼なりに祖国愛を表現しているのか・・・

しかしなんでこう漫画や小説に出てくる風紀委員長は一番風紀を乱しているんだ・・・

「気をつけるよ、ああ見えても実力は最強クラスなんだから」

まあ、これはお約束というものか・・・

気にしていたら始まらないな・・・

俺たちは風紀委員長をそのまま教室に向かった

+ + + +

教室の前まで来るとアリスとラインは自分の教室に向かった

そういえばあの二人は四年生なんだったな・・・

いつも呼び捨てで忘れていたがあの二人は上級生だ

学校では敬語を使わなきゃな・・・

ガララララララ

扉を開ける

すると、皇聖院が近づいてきた

「大丈夫ですか？お怪我はないですか？」

そわそわしながら聞いてくる

なにを心配しているのだろう？

とりあえずは優しく返事をする

「別に大丈夫だよ、そっちの方こそ何かあったの？」

「い、いえ、大丈夫ですわ」

うーん、全然大丈夫には見えないのだが・・・

・・・まあ皇聖院が話したくないというのなら聞かないのがベストか・・・

『お前ら座れー！！』

五月蠅い担任が来たので急いで席に座る

しかし俺の席は教卓に近いので担任の五月蠅い声がよく聞こえる・

・

『お前ら元気かー！！』

五月蠅すぎだ・・・

毎日の事だが朝一からこんな担任の警声を聞かなければならないなんて・・・

とある科学と魔法が交差する物語の主人公ならこういうだろう・
不幸だ・・・

+ + + +

キンコーンカーンコーン
4時限終了のベルが鳴る

「昼食か・・・そういえば今日弁当忘れたな・・・購買にでも行くか・・・」

歩いて購買に行く

（購買）

ワイワイガヤガヤ

購買はかなりの人で埋め尽くされていた
その中で列を見つける

終わりまで行くと先が全然見えない・・・

この列に並ばなければいけないのか・・・

面倒くさいがこれも俺が弁当を忘れたせいだ・・・
仕方ない、と列に並ぶ

「天和君？」

・・・と後ろから声をかけられ振り返る
そこには見知った顔の秋宮と美華メイファがいた

「あ、やっぱり天和君だ」

この二人前も一緒にいたような・・・
付き合ってるのか？

まあ他人の恋路に興味は無いんだが・・・
とりあえず秋宮を縄で縛って、それから・・・

・・・つといかん、殺人は犯罪だった・・・

「天和君も購買でパンですか？」

秋宮が尋ねてくる

まあ並んでいるからそれ以外はないと思うのだが・・・

「ああ、そうだよ」

「だったら一緒に食べない？」

答えると美華が提案をしてきた

「いいよ、なんならクラルと浪川も呼んで大勢で食べようか」

つぎは俺が提案をする

「いいですね、では皆で食べましょうか」

「それがいいな」

購買でパンを買うつと三人で教室に戻る

とりあえずクラルと浪川を呼ぶ

二人とも快く参加？してくれたので

とりあえず教室の端で机をくっつけ五人で昼食をとる

俺達三人は購買のパン、浪川は近くのコンビニエンスストアで弁当を買ったようでコンビニ弁当

クラルはでっかい重箱のような弁当箱を持っていた

「でかい弁当箱だな・・・クラル・・・」

「皆にもあげるよ、ほら食べて」

クラルが弁当箱を開けて俺達に差し出す

どれもおいしそうだ・・・

とりあえず卵焼きをとって食べる

うまい！

これはものすごくうまい！

「どう？おいしかった？」

「すごくおいしいぞ、これ」

「ほんとだ、すごいおいしい」

美華も食べて目を輝かせる

「そうかな・・・」

クラルが恥ずかしそうに頬を染める

「これってもしかしてクラルが作ったのか？」

「そうだよ、今日はちょっと作りすぎたから皆たくさん食べてね」

バクバクムシャムシャ

横ですごい音が聞こえる

音のするほうを見ると秋宮がものすごい速さで弁当を食べていた
どおりでさっきまで何も喋らなかったわけだ・・・

しかしこれはすごい、足を片膝上げ口からボロボロ食べたものを落
としては拾い、大口を開けてまた食べる、そして箸の使い方も適当だ
いつも行儀正しく、品行方正の塊だとおもっていた秋宮にこんな一
面があったなんて

俺は正直驚きを隠せなかった

「まさか秋宮がな・・・」

「完全な人間なんていませんしね」

「ま、コレも個性よね・・・」

「そ・・・う・・・だな」

みんなは完璧な人間などいない、コレも個性だと理解した

俺は秋宮にもこんな一面があるということを知ってなんだか安心した

しかしそれは突然おとずれた

ピンポンパーンポン

『風紀委員は現時刻をもって生徒会執行部に宣戦布告します』

「・・・・・・へ？」

俺は耳を疑った

周りでは・・・

「とうとうか・・・」

「やっぱりね」

「予想通りだな・・・」

皆が口々につぶやいている

俺は事もあるうに委員会対抗戦争のことを忘れていた・・・

我ながらありえないミスだ・・・

とりあえず宣戦布告をくらったのなら生徒会室に行こう

そこなら誰かいるはずだ・・・

俺は教室を飛び出した

「僕もついていくよ」

後ろからクラルが追いつく

「分かった」

生徒会室へと通じる階段を上る

すると・・・

角の先には風紀委員と書かれた腕章をつけているものが三名

ここからじゃ校章の色は分からないがたぶん上級生だろう・・・

いくら学年1位と3位だとしても二人とも実戦経験が少ない

対して相手の風紀委員は学院内の風紀を守る組織なので強い人が集まっている

そして日々実戦用の訓練をしているのだから俺達よりも経験は豊富だから俺達二人の実力で勝つのは困難だろう・・・

さて、どうしようか・・・

「お前ら何してる？」

後ろから声がする

振り返ってみるとそこには・・・

「兄さん!!」

クラルの兄貴がいた

「どうした？あの程度の輩が倒せないのか？

そんなんでよく生徒会執行部になれたな・・・」

この人はいつも口が悪い

「兄さん!!」

クルルの兄貴がいた

「どうした？あの程度の輩が倒せないのか？

そんなんでよく生徒会執行部になれたな・・・」

この人はいつも口が悪い

「まあ、あんなところに陣取られていれば通行の邪魔だな・・・

片付けてこよう」

そういつて彼は歩き出した

「生徒会執行部は最強だ。それを覚えておけ」

なんだ、彼は最終回の様な事を言いながら風紀委員に近づいていく

「お、お前は・・・生徒会副議長クルト・ジークムント!!」

「そこをどけるんだ。通行の邪魔だ」

「そう言う訳にはいかないな・・・、今は戦争中だ」

「俺がいない間に一体何があつたんだ？風紀委員は生徒会執行部の強ささえ忘れたのか？」

「三対一で何ができる。いくら生徒会役員でも勝てないだろ!」

「本当になめられたものだな・・・仕方がない・・・」

「行くぞ!!」

リーダー格の男が叫ぶ

「「「魔具発動!!」」」

三人の手に魔具が現れる

対するクルトも面倒くさそうに

「魔具発動」

魔具を発動させる

クルトの魔具は斧だ

しかもクルトの身の丈ほどもあるすごくでかい戦斧だ

「来たれ火の精霊よ、我にあだなす者を焼き尽くせ、爆ぜろ紅」

クルトが火魔法を放つ

すると目の前にいた風紀委員が体中を抑えてのた打ち回り始めた

「熱い！熱いよ〜！」

「誰か助けてくれ〜」

クルトはその風紀委員を見下すとまたスタスタと歩き出した

一応後で水魔法で風紀委員の体の火は消しておいた・・・

+ + + +

生徒会室につく

ガララララ

扉を開けるとそこには

ヴィルヘルムさんとデュートリヒさんコンティーヌさんがいた

「戦況はどうなっている？」

クルトが三人に聞く

「最悪だ、篠原と榎本、そしてティーナがやられた」

「まったく生徒会執行部が情けない・・・」

クルトは呆れきった顔をしている

「仕方がないだろ・・・宣戦布告放送のすぐ後に奇襲を喰らったんだ、まあ榎本は華欧と戦って負けたんだ かな・・・」

デュートリヒさんは暗い顔をして言った・・・

「昼休みだけでコレだけの被害か・・・、少しきついな・・・」

「ヴィルヘルム、華欧とは俺がやる、だから他の風紀委員を頼めるか？」

デュートリヒさんは平然と言っているが、これはかなり怒っている様だ・・・

「待つてもこれ以上来そうにないから俺は帰るな・・・」

そういつてクルトさんは生徒会室を出て行った・・・

「あまり無茶はするなよ」

そういつてデュートリヒさんとコンティーマさんも生徒会室を出て行った

ヴィルヘルムさんはいないし・・・

「俺達も帰るか・・・」

俺達は教室に戻ることにした

生徒会室から出て曲がり角を曲がると

風紀委員長の華欧とヴィルヘルムさんが戦っていた

第七話

やばいな・・・

廊下ではヴィルヘルムさんと華欧が戦闘をしていた

・・・別にそれ自体が問題ではない
問題はその戦闘の内容だ

「どうした？ 終わりか？」

「・・・まだだ、もう一度・・・」

戦闘は華欧が圧倒的に優勢だった・・・

昨日聞いた情報では、二人とも同じ六年生で、華欧が総合では学年三席でヴィルヘルムさんが学年次席で、実技では華欧が学年主席、ヴィルヘルムさんが学年次席と聞いた

しかしこの試合はそうとは思えないほど圧倒的だった

「そんな攻撃では、俺に傷一つ付けられないぞ」

「そうか・・・ではこれならどうだ」

ヴィルヘルムさんの足元に黄色い魔方阵が浮かび上がる

「集まれ風の精霊よ、固まりなして力となれ
来たれ雷の精霊よ、我にあだなす者を滅ぼせ、轟け雷」
これは風の亜種、雷の魔法だ

「そうきたか・・・」

華欧の足元に赤色の魔法陣が浮かび上がる

「来たれ火の精霊よ、我にあだなす者を焼き尽くせ、爆ぜろ灼」

華欧の周りが炎で包まれる

・・・そういえば魔法が発動すると足元に魔法陣が浮かび上がるんだっとな・・・

戦闘に集中していると案外気が付かないものだ・・・

・・・と、今はそんなことを考えている場合じゃなかった

ヴィルヘルムさんが放った雷魔法は華欧の周りに広がった炎の前にかき消された

これが華欧の実力か・・・

デュートリヒさん達が戦うなど言った理由が分かった・・・

強すぎるんだ・・・華欧は・・・

ヴィルヘルムさんが本気で戦っても勝てない
勝てないどころか全く歯が立たないなんて・・・

「仕方が無い・・・」

ヴィルヘルムさんが華欧に向かって突進する

無謀すぎる気もするがヴィルヘルムさんも馬鹿ではない
何か策があるはずだ・・・

「そつくるか・・・いいぞ、来い！迎え撃つてやる」

華欧は魔具を構えて迎え撃つつもりだ

ここで余談、華欧の魔具は刀だ、ヴィルヘルムさんの魔具は長剣だ
リーチは断然ヴィルヘルムさんの方が長い。

ヴィルヘルムさんは華欧のそばに來ると魔具を構える

対して華欧はヴィルヘルムさんに真上から刀を振り下ろす

ヴィルヘルムさんはそれを剣でいさめると・・・

「お前なんかに構ってられるか・・・」
速足でその場を去っていった

・・・え？、逃げた？

「さっきのあれ、逃げてるよね・・・」

クラルも驚いた表情をしている

「まさか・・・あれも作戦だろ・・・」

作戦であってほしい。まさか敵前逃亡なんて事をするわけが・・・

「ちっ・・・逃げられたか・・・」

華欧がいらだつたように言う

やっぱり逃げたんですよね・・・

「だったら仕方が無い・・・そこにいる雑魚を潰しすか・・・」

あ・・・ばれてた？

「止まれ華欧、後輩に手出しはさせない」

・・・？誰だろう？誰かが華欧に話しかけている

「おいおい、次はお前かよ・・・お前は俺の実力を知ってるだろ？

お前は俺に勝てないことぐらい分かってる賢い奴だと思っっていたん

だがな・・・」

「なにがあるうと私は生徒会副会長なのだから、目の前で生徒会執行部のメンバーがやられそうになっていたら助けないわけには行かないでしょう」

「ああ、はいはい。そうですね、そうだろうね。まあ実際に戦った
ら分かるよな・・・

6年次席が勝てなかった奴に5年次席が勝てるかどうかをなあ！！」

「「魔具発動！！」」

どうやら戦闘が始まったようだ

廊下から剣と剣の打ち合う音が聞こえてくる

しかし一体誰が戦っているんだ？

話し声から察するに女の人なんだが・・・

ひょこつと顔を出してみる

戦っている女性の方を見える

どうやら一回転しているようで背中しか見えない

背中にすらつと伸びたきれいな銀色の髪が美しい・・・

そして二人はまた一回転をした

今度は顔が見える

燃え盛るように美しい緋い瞳、吸い込まれるような唇・・・って俺

はなにを言ってるんだ・・・

しかしやはり華欧は強い・・・

段々と押され始めている

女性の足元に茶色い魔法陣が現れる

「来たれ大地の精霊よ、我にあだなす者を碎け」

女性の周りの大地（校舎）が盛り上がる

華欧がそれに気をとられていると・・・

華欧の腹に風魔法が直撃した

「ぐふ・・・なんだ？・・・お前たちか・・・」

華欧が後ろを振り向くと

コンテューヌさんがいた

「まったく、一人で勝てるわけ無いでしょ」

「ごめん、急ぎすぎた」

「もうすぐデュークもくるからそれまでの時間を稼ぎましょう」

・・・この人たち二人掛かりでも勝てないということか、これは・・・

「僕たちも参加したほうが良いんじゃないの？」

後ろで現場を見ていたクラルが聞く

「それよりもやるべきことがありそうだ・・・」

クラルのほうを見ると近づいてくる風紀委員が数名・・・
今の現状ではあの二人の邪魔をさせるわけにはいかない
ならば俺たちで倒すしかないだろう・・・

「そうみたいだね・・・」

クラルも敵に気付く

「僕は生徒会執行部じゃないんだけれど・・・」

クラルは学級委員長だ

学級委員長は他の委員会とは全く違う独自の委員会

学級委員会に入っている

原則委員会对抗戦争に他の委員会が絡むのは禁止されているが
別にばれなければ問題ない

学級委員会も生徒会執行部と同じようなものだしな

「先輩、ここを通してもらいます」

リーダー格の奴が話しかける

相手の校章を見る。校章の色は青、つまり二年生か・・・

二年生なら実戦経験は皆無だろう・・・

ならば負けることは無い

「通りたければ俺たちを倒していけ」

「では、力ずくで行かせてもらいます・・・魔具発動！

2年生 桂木 文也、行きます！！」

元気があって良いね

まあ・・・名乗る必要は無いんだけど・・・

さてどうしようか・・・

相手は4人、しかし全員二年生だ

「ここは僕に任せて」

クラルが自信ありげに言う

しかしクラルは学級委員、わざわざ勝てなくも無い相手に危険を犯

すわけにも行かないだろう・・・

「いや、大丈夫だ、クラルは下がってる・・・」

クラルの前に立つ

「3年生 学年主席 天和京介だ かかって来い・・・魔具発動！」

俺の手に刀が現れる

風紀委員が三人でかってくる

どうやらもう一人はクラルを警戒しているようだ・・・

ブン！！

おっと余所見をしている場合じゃない

連携がうまく言っていないといっても相手は三人気を引き締めてかからないと・・・

どうにか各個撃破できないもんかな・・・

相手の攻撃を避けながら隙を探る

しかし面倒くさい、一人専用の魔具持ちがいて間合いが違う

そして専用の魔具を持っているだけあつて動きが違う

だが、それでも昨日戦った風紀委員のほうが早い

俺は相手の攻撃を紙一重で避け首筋に一閃、相手は地面に倒れこんだ

「あと二人！！」

声高々に叫ぶ

「ひ、ひい・・・」

どうやら一人は怯んでくれたようだ・・・

しかしもう一人は全く動じない

さすがは専用魔具持ちだ・・・

こういう時は先に怯んでいる方を倒してしまった方が良さそう
そのあとにこいつを一对一で倒せば問題ないだろう

怯んでいるほうに電光石火で近づき腹に斬撃を喰らわす

これで二人目もグロッキーだ

残りは一人・・・専用魔具を持っている、名前は・・・桂木だった

か・・・

桂木はじつとこっちを伺っている

そして・・・俺の間合いに近づくと一瞬で剣を振く

間一髪でそれを防ぐと無防備になった相手の腹に突きを入れる

これであいつもグロッキーだろう・・・

四人目は・・・クラルによって倒されていたのでここでの戦闘は終了だろう・・・

ガイン、ガイン

廊下で音がする・・・

おっと忘れていた

廊下を覗くとコンティーンさんとあの女性が華欧との戦闘をまだ続けていた

しかし戦闘の内容はヴィルヘルムさんのときと同じ・・・

華欧が圧倒的に優勢だった・・・

「飽きてきたな・・・そろそろ終わらせるか？」

「だめね、もうこれ以上保ちそうに無いわ」

だめだやられる・・・

そう思った瞬間・・・

「遅れてすまなかったな」

・・・デュートリヒさん参上！！

場の流れは一気にこっちのものとなった

「華欧、ずいぶんやってくれたな・・・」

「デュートリヒのお出ましか・・・」

「今までの借りを全部返してやる、覚悟しろよ」

「お前との連戦は少しきついな、おいとまさせてもらおう」

「この状況で逃げれるとでも？」

「問題は無いだろう・・・なんせ下は風紀委員会が占拠しているからな・・・」

「下？・・・まさか!！」

「じゃあな」

そういつて華欧は窓から飛び降りてしたの階に行った・・・
なんて人だ・・・
ミスったら死ぬぞ・・・

「ふう・・・去ってくれたか・・・」

デュートリヒさんがほっとしたようにため息をはく
「ひとまず安全だな・・・」

「そうみたいね・・・」

「ではとりあえず皆教室に戻ってくれ、もうすぐ昼休憩も終わるしな」

そういわれて時計を見る

昼休憩が終わるまであと五分といったところだ・・・

「解散か・・・」

皆散り散りに帰っていく

昼休憩だけでこんなに疲れるのか・・・
だったら放課後はどうなるんだ・・・

先が思いやられる

第八話

「これでホーミングを終わる」

ホーミングも終わりいよいよ戦争再開か・・・

確か期限は5時までだったはずだから・・・これから1時間ずっと戦闘しなきゃいけないのか・・・

面倒くさいな・・・

とりあえず生徒会室に行くか・・・

「京介くん、生徒会室について行くよ」

クラルを連れて・・・

二人で階段を上る

目の前には風紀委員が三名。どうやら待ち伏せをくらったようだ・・・

・

校章を見る限り相手は3年生だ

相手になるとは思えない

「君たち其処をどけてくれないかな？」

少しやさしめに言う

「そうしたいんだけど、こっちにも事情があつてね!!」

あいては今にも襲い掛かりそうな剣幕で言つて来る

・・・これは話し合いじゃ結論が付きそうに無いな・・・

やっぱり最後は実力だよな・・・

「そうかよ・・・だったら実力でどけるまでだ・・・」

「『魔具発動!!』」

相手の魔具が現れる

それにしても・・・トンファーって使いづらくないか？

よく風紀委員はこれを常備するようにしたな・・・
おっと・・・考えている暇は無いな・・・

相手の一人が急接近してくる

刀では超近接戦闘は不利だと考えたのか？

しかしそれでは考えが甘い

急接近してくる相手に対し真上から刀を振るう

当然のように其処からできたがら空きの懷を相手は狙う

まさか、俺がこうなることを予想していなかったとしても言うのか？

「甘い!!」

相手の風紀委員が吹っ飛んだ

どうやら相手は何が起きたかわからないようだ

俺はさつき刀を大きく振り隙を作った

相手はその隙を利用し俺の懷に入ってきた

しかし俺はこれでも実技で学年1位を取った奴だ

そこから刀を降り戻し相手の腹に当ててふつとばす事など簡単だ

俗に言う『ツバメ返し』かな・・・

どうやらうまくヒットしなかったようで相手はすぐに立った

昼の2年生とは違ってタフだ

まあそのほうが戦いやすいかな・・・

弱いもの虐めに為らないからな

ちよつと本気見せようか・・・

三分後

3年生三人をようやく倒した俺たちは生徒会室に到着した
それと同時に聞こえる放送

内容は・・・

『我々図書委員は風紀委員に宣戦を布告します』

『我々保健委員は風紀委員に宣戦布告致します』

『我々環境委員は図書委員に宣戦布告します』

『我々広報委員は生徒会執行部に宣戦布告します』

各委員会の戦線布告のオンパレードだった

しかもところどころおかしかったような・・・

とりあえず生徒会室に入る

ガラガラ

生徒会室の中には

デュートリヒさんとヴィルヘルムさんとコンティーヌさんとクルトとアリスと

ジャンナさんがいた

「お前たちも無事到着か・・・残りは来そうにないし話を進めるか・・・」

デュートリヒさんが仕切る

「待ってください。一つ疑問があるので・・・事前に聞いていた情報と実際の現象が全然違うのですが・・・」

「そのことについても話す、とりあえず座れ」

「現在の状況を確認する。現在は図書委員を味方に付けることには成功したが、逆に広報委員が敵に回ってしまった。だから作戦を練り直す。まあ俺たちの目的は華欧を倒すことだけだ。だから誰が味方に付こうとたいした問題ではないな」

「華欧は強いぞ・・・戦ってみると分かる」

ヴィルヘルムさんが華欧の強さを皆に教えている
さて俺はどうしようか・・・

「作戦はこうだ・・・」

デュートリヒさんが作戦を提案する

「これがうまくいくかな・・・」

「うまくいったら勝てますわね・・・」

「・・・俺たちにかかっている・・・」

「とりあえずジャンナとクルトは3階への階段を占拠してくれ

「気安く俺の名前を呼ぶな!!」

クルトがいきなり怒り出した

どうやらこの二人かなり仲が悪いようだ

「では皆戦闘配置についてくれ。作戦開始だ!!」

俺たち（天和、クラル、ヴィルヘルム）は3階に降りる

3階のA棟は完全に風紀委員に占拠されている

俺たちはこの3階の守備隊を倒すことが目的だ

「気を抜くなよ、ここからは上級生がいつぱいだ・・・」

ヴィルヘルムさんが忠告する

いままでは同級生や下級生とばかり戦っていた

唯一勝てた4年生も皇聖院と二人掛かりだった

俺、本当に戦力なのか？

「其処を通せ!!」

「ここは死守する」

どうやら階段でも戦闘が始まったようだ

いつまでも突っ立っているわけには行かない

「行きましょう。ヴィルヘルムさん」

見る限り相手の風紀委員は10人近くいる

・・・ちよつと多すぎじゃないか・・・？

「ふむ、まずは先輩の実力を見せてやるか・・・お前ら見とけ・・・」

そいつってヴィルヘルムさんが前に出る

「お前ら、だったら一人で十分だ。来い」

珍しい、ヴィルヘルムさんが相手を挑発している

「なめてるのか？」

「上等だ!!」

相手の反応もごもつともだ

10人相手に一人で十分だというのは無理がある

「『魔具発動』」

「来たれ火の精霊よ、我にあだなす者を焼き尽くせ」

「来たれ土の精霊よ、我にあだなす者を砕け」

魔法が一気に放たれる

これはヴィルヘルムさんピンチ？

「来たれ風の精霊よ、我を守る盾となれ」

ヴィルヘルムさんの前に巨大な風の壁ができる

風紀委員の放った魔法は風の壁に当たるとそのまま消えていった・

・

これがヴィルヘルムさんの実力・・・

華欧戦では手も足も出ずに弱いようにも見えたが紛れも無いこれが
6年生次席の実力だった

その後もヴィルヘルムさんが暴れまくり

俺が何かすることもなく敵の風紀委員は一掃された

すごいな・・・

これで風紀委員執務室までの道のりは敵がゼロだ

俺たちはこのまま風紀委員執務室へ向かう

このまま華欧を倒したら俺たちの勝ちということになるのかな？

だったら簡単なことだ

いくら華欧が強いといっても生徒会執行部の主力が集まれば倒せな

いほどではない

今までの苦労が嘘のようだ・・・

廊下を走り出す

「止まれ」

俺の幸せな妄想？を邪魔したのは廊下に立つ一人の生徒だ
あれは風紀委員会副委員長だ・・・

「これ以上は通せませんね、ここでやられてください」

「お前では勝てない・・・其処をどける」

「なめられたものですわね、私があなたに劣るとでも？」

「お前は5年生だろう・・・クラリスに勝てないような奴に俺は負けない」

「言ってくれましたわね・・・では私の实力を見てもらいます・・・
・・・魔具発動」

二人が魔具を構える

しかしあの副委員長強いのかな？

先ほどの会話ではそんなに強そうに見えなかったが・・・

・・・というかさつきから俺たち活躍無いな・・・

「近衛隊は後ろの二人を狙いなさい！！」

おっとどうやら俺たちも狙ってくれているようだ・・・

副委員長の後ろから新手の風紀委員が現れる

数は10人くらいだろうか・・・

近衛隊とだけあって強い人の集まりなのだから勝てるか分からない
結構ピンチである

しかし俺にとってはそんなことよりも相手にしてもらえたのが少し

嬉しかったというのは秘密の話である

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前はあのときの・・・・」

どこかで聴いたような声がする

はて？一体どこだろうか？つい最近の気がするんだが・・・
声がした方向に顔を向ける

そこには金髪、碧眼、細目の男がいた

・・・思い出した

前戦った風紀委員だ

なるほど・・・近衛隊だったのか・・・
通りであればど強いわけだ・・・

「あの時の借りを返してやる」

相手が殺気をビンビンと放ってくる

この前一人で勝てなかった相手だ

今度は一人で勝ってやる。油断はしない

「「魔具発動」」

戦闘が始まる

横を見るとクラルも戦闘を始めていた

「余所見か・・・いけないな・・・」
しまった！！

相手のトンファーがものすごい速さで懐に入ってくる

そしてそのまま俺の腹にヒットする

ぐふぁ・・・

俺は軽く吹っ飛ばされた

これは痛い・・・結構くるものだ・・・

そこに間髪いれず相手の二撃目が来る

さすがに何発も喰らってやるほど俺はお人よしではない
すかさず刀でそれを防ぐと詠唱を開始する

足元に赤い魔法陣が浮かび上がる

「来たれ火の精霊よ、我にあだなす者を焼き尽くせ」
それが相手にヒットする

相手は痛そうにもだえながら詠唱する

足元に青い魔法陣が浮かび上がる

「来たれ水の精霊よ、我にあだなす者を呑み込め」
よくあの状態で詠唱したものだ・・・

しかし防ぐことは容易だ

足元に茶色い魔法陣が浮かび上がる

「来たれ土の精霊よ、我を守る盾となれ」

足元から大地（校舎）が盛り上がり盾を作った

前回の敗戦？以降俺はこの人に勝つために魔法を強くした
攻撃パターンも大体読んでいる

これなら相手に勝つこともできそうだ

近接戦に持ち込む

魔法で勝っていても相手を倒すには魔具での直接ダメージが一番なので

相手に接近する

ここからは単なる肉弾戦だ

二人でかなり速い速さで戦う

傍から見れば互角に見えるかもしれないが

内容は若干俺が押してきている

そして相手のわずかな隙を狙い思い切り斬る

しかし俺の斬撃は飛んできたトンファーで止められた

「其処までだ。お前はもう終わりだ」

残りの風紀委員が参加してきた

どうやら仲間がピンチになってから下級生相手でも多人数でくると
言う

先輩にしては情けない奴らのようだ・・・
「形勢逆転だな・・・」

さつき戦っていた風紀委員も体勢を立て直す
本当に形成が逆転してしまった・・・
これで人数は4対1だ

1対1でもこんなに苦戦？したんだ

4対1だったら勝てるわけが無い

ヴィルヘルムさんは副委員長（他二名）と戦っているし

援軍はきそうにない・・・

俺たちだけでバトルしかないのか・・・

・・・・・・これはやばくないか・・・・・・

第九話（前書き）

スイマセン

急ぎ足で書きましたので
所々抜けているかものです

第九話

バキ、ドコ

・・・4対1はやはり無理だ・・・

相手は近衛隊だ。一人一人がありえないほど強い

それが四人がかりできている

・・・攻撃を防ぐのだけで精一杯だった

「どうした？さっきの威勢はドコに言った？」

やばい。この人すごい悪役みたいなことを言ってる・・・

というかこれはリンチ以外の何者でもないような気がするんだが・・・

・

仕方が無い・・・俺が主人公たる所以をあの人たちに教えてやろう

ドコ

強烈な一撃が俺の腹にヒット

やばい気を失いそうだ・・・

「おいおい、これで終わりか？」

あんたは本当に悪役みたいなことしか言わないな・・・

「幾等なんでも後輩にこれはどうかと思うんだが……………」

お、近衛隊にも普通の人が居るんだな
覚えておこう

「甘ったるいことを言うなこれも戦争なんだ」

おお、まさにどこかの軍人のようだ
さすが悪役だ

……………今なら攻撃の手が止まっているじゃないか
今ならいける。俺だって伊達に主人公やってるわけじゃないんだ

「来たれ炎の守護霊よ我にあだなす者に裁きの炎を喰らわせん、燃
える蒼炎」

俺の足元に赤い魔法陣が浮かび上がる

俺のオリジナル詠唱だ

魔法学を研究していた親父が俺になんかした結果俺には守護霊が付
いた

だからその守護霊を利用した魔法が俺は使える

学院側も『貴重なデータ』といって使用を許可してくれた

俺としてはあまり使いたくなかったが、ピンチの場合なら仕方が無い

……………守護霊がいるなら守ってくれたら一番なんだけどのな
……………

このオリジナル詠唱、他と何が違うかといえば
炎の色、性質だ

普通の魔法なら火魔法なら術者の力量によって炎の純度〓熱さが決

まる

要するに術者が強ければ強いほどその炎も強くなる

しかし俺の場合、強くなれば炎の純度が上がることは同じなんだが炎によって大体の温度が決まっている

中には熱くない炎なんてのも、存在する

俺が今出しているのは

蒼炎——青い炎だ。これは普通の炎だが熱さは他の火魔法と比べると桁違いに高い

俺が出せる火魔法の中では最高温度の魔法だ

説明はここまでとして、喋ってるだけじゃ、始まらないな
……まあ喋っては無いのだが……

まあ普通は人に向けてはいけないのだがここは魔法学校
問題ないよな……

「お前、なんだその炎は？」

「そんな炎魔法見たこと無いぞ」

風紀委員がナニそれ？とでも言いたそうな顔で見ている

「先輩方、やられてください」

そう言いながら俺は魔法を放つ

風紀委員も応戦して魔法で盾を出すがあっけなく消え敗北——

——にはならなかった

まだ一人残ってる

「あれを喰らってまだ生きているとは流石ですね」

「まあ、死ぬことは無いと思うが、あの程度ではやられはしないぞ」

・・・そういえば一応出力は抑えていたが、炎の出力がえらく低かった・・・これは学院側の処置なのか
・・・死人が出ないようにするための

「だったらこれでどうですか」

やっぱり最後は肉弾戦でしょ
作戦？殴りあうのが一番だよ

だってそれでこそ実力が証明できるからね

「お前はやはり突撃なのか・・・聞いたとおりだな・・・」

相手の風紀委員がやれやれ、と首を振っている
俺が突撃だけのイノシシだと思ったら大間違いだぞ
伊達にも3学年、学年主席なのだから

「来たれ風の妖精よ我にあだなす者を切り裂け」
俺の足元に緑色の魔法陣が浮かび上がる

「どうせ目潰しなんだろ・・・」
俺の作戦はバレバレか・・・

「そうですよ」と
即座に懐に入り込み斬撃を食らわす

キン

魔具どうしが触れ合う
さすが風紀委員近衛隊、楽に倒さしてはくれない
キン、キン、キン

高速で戦う

どうにも相手の動きが鈍い
どうやら先ほどの攻撃が効いているようだ
これなら勝てる・・・かも

刀を振り上げる

「これでラストだ!!」

「はい、そこまで!!」

いきなりのことばに振り下ろそうとした刀を落としてしまう

「この委員会対抗戦争は生徒会執行部の勝ちよ」

へ？一体どういうことだ？

訳が分からない・・・

・・・と思っていたら風紀委員執務室から出てくる生徒会執行部の
面々

デュートリヒさんにコンティニューさん、あとは昨日華欧と戦っていた方だ

とりあえずデュートリヒさんに話を聞こうと近づいたらデュートリヒさんの後ろから

華欧が出てきた

「うわああ」

思わず声を出す

「ああ？うわああてなんだ、うわああって？」

うわ、怖ええ〜これが風紀委員長の睨みかよ

動けずに居る俺

これを蛇に睨まれた蛙というのか……………

「おい、華欧睨みを効かすな」

「ああ、はいはい」

「詳しい話は生徒会室で話そう。皆生徒会室に戻ってくれ」

華欧はその後風紀委員執務室に戻っていった

〈生徒会室〉

俺は生徒会室に戻るやいの一番にデュートリヒさんに質問

「デュートリヒさん勝ったってどういことですか？あと彼女は誰ですか？」

「ああそれも説明しよう。まあすごく簡単に言くと華欧を倒した
それと彼女はクラリス・ヴァイセ。生徒会副会長だ」
なるほどクラリス・ヴァイセと言うのか覚えておこう

「どうやって勝ったかぐらいは分かるよな？昨日作戦を説明したんだから」

そつえば昨日作戦を説明していたな……

「俺たちのこれからの目標は広報委員の撃破」

・ 　　そうか……風紀委員を倒したからといって終わりじゃないのか……

「なのだが、作者が対広報委員戦を書く気が無いのでそこは気にしないで今日は皆解散だ」

作者都合で休みか・・・なんてだめな作者だ・・・
まあいいこれで休めるんだ
今日も疲れた・・・

「だが、広報委員が残っているので風紀委員のゲリラ攻撃が無いとは言い切れん
二人一組で帰るように」

またか・・・しかし風紀委員もがんばるな・・・..
確か昨日は帰宅時のデュートリヒさんを狙って返り討ちにあったと聞いたのだが
その時の風紀委員の人数は10人近く居たと聞いたのに・・・
ま、俺を狙うような人はいないだろ・・・

「なお、天和お前は風紀委員近衛隊を一人で破ったのだから狙われると思う。だから主力メンバーの誰かが天和の警護に付くことにする」

・・・そうか、俺近衛隊を破ったんだよな・・・
そりゃ狙われるか・・・..

「では、天和の警護には私がつきましょ」
そういつて名乗りを上げたのはクラリスさん

「いいのか？クラリス狙われるぞ」

「問題ない。風紀委員など華欧が居なければ烏合の衆と同じよ」

「すまないな……」

なんなの？俺に付く人は死ぬ感じなのか？

絶対死地に赴く人へ向ける台詞？じゃないか

この雰囲気まさかデュートリヒさんとクラリスさんは……

「デュートリヒ、私という女がありながら他の女に手を出すなんて」

コンテイーヌさんの後ろから黒いオーラが見える

「は？俺がいつお前の男になっ……すまん、クラリスに手を出すわけがないだろう」

デュートリヒさんがとあることを言おうとした瞬間コンテイーヌさんの手から恐ろしい武器が多数現れデュートリヒさんは自身の発言を言い換え謝罪の文面に代える

「分かってくればいいんだよ」

コンテイーヌさんがデュートリヒさんに抱きつく

それを見て不機嫌な人が二人

先ほどからずーと生徒会室に居た

デュークさん。そして……

「いちゃつくなら、よそでしろ。不愉快だ」

最近分かったがデュートリヒさんが大嫌いなクルト

「いや、俺は好きでしているんじゃない……」

「なに言ってるの？クルトだってモテモテの癖に」

コンテイーヌさんの言葉にいつそう機嫌を悪くしたクルト
相変わらずこの男は分かりづらい

「ふん、まあいい俺は帰るぞ」

そういつて生徒会室から出て行った

「あ、兄さん。待って……」

そういつてクルルも生徒会室から出て行った
相変わらずクルルはクルトに優しいな……

「まあ皆もう帰っていいぞ」

「デュートリヒ、いつまで仕切っているのだ。生徒会長は私だぞ」

作者がキャラを減らすために空気に等しくしているせいで
存在がどんどん薄くなり発言回数もどんどん減っている
生徒会長代理デューク・ウェルキンスさんが一言
不機嫌だった理由はこれか……

「あゝ、すまんすまん。お前の手を煩わせるもないと思ってな」

そういつて軽く流すデュートリヒさん
しかしデュークさんはまだ怒っている

「天和、あいつらの無駄な議論に付き合つことはない。帰るぞ」

クラリスさんが小声で耳打ちする

ほのかに息があたってくる

「了解です。帰りましょう」

「本当にあいつらは・・・大丈夫か！？天和」

クラリスさんの顔が近づく

なんだろう胸が剣に刺されたように痛い

これが恋だろうか・・・

と思ったら・・・デュートさんとデュートリヒさんの戦いに巻き込まれ

魔具が胸に刺さっただけだった・・・

やばいぐらい痛い・・・

「大丈夫か？天和」

「天和、死んでないか？」

ああ、ダメだ・・・意識が薄れる・・・

バタ・・・

第九話（後書き）

最後はギャグに走りました
すいません

第十話

・・・おい・・・

「・・・どうやら気を失っていたようだ
「まったく・・・お前達は何をしてるんだ」

「俺は一応上級生なんだが・・・」

「我輩は悪くないであろう」

クラリスさんに怒られるデュークさんとデュートリヒさん
略してダブルデューコンビ
二人ともデューで始まって間違えそうな名前だ

まあコレも怪我の功名というのか
俺は今ちやっかり膝枕の状態だ
もちろん膝枕をしてきているのはクラリスさんだぞ

最近の俺はついてるのが尽いていないのか分からないが
膝枕を二回されている

まあ必ずそのときには大きなダメージを食らっているのだが・・・

神よ二度あることが三度あるのを望むぞ

とまあそんなあほな事を考えていたら
クラリスさんたちも俺が起きたことに気付いたようだ

「大丈夫か？天和、怪我はないか？」

心配そうに話してくれますが
魔具なので怪我はない

「大丈夫です、クラリスさん。魔具の攻撃ですから……」

「大丈夫ならばよかった。其処の二人天和にしっかり謝りなさい」

強気な女性だな……

しかし言っている相手が上級生だということに気付いているのだろうか？

「すまないな、天和。まあ魔具だから傷はないだろう。大丈夫だな」

「すまん、天和。まあ代償はあったし問題ないだろう？」

なんて二人とも的を得たことを言うんだ

まあデュークさんの発言には反省という意味はなさそうだが……

「天和、歩けるか？」

「はい、大丈夫です。帰りましょう」

魔具での攻撃なのでさして痛みは残っていない
うん、大丈夫だ

そう自分に暗示をかけながら時計を見る

どうやら俺は5分ていど気を失っていたようだ

「そうだな、帰るか」

+ + +

帰り道にて・・・

二人で並んで帰りながら話をしている

「さつきはすまなかつたな。全くあの二人は」

「いえ、大丈夫ですよ。気にしていませんから」

「そうか、ならいいんだ。どうにも生徒会執行部の奴らはどこかが抜けているからな・・・」

「ハハハ、だったらクラリスさんどこか抜けているんですか？」

クラリスさんの言葉は長年その人たちを見ているようだった

たしかこの生徒会執行部のメンバーは最近集まったからそこまで付き合いはないはずなんだが・・・

「いつもはしっかりしているんだがな・・・私か？私もどこかが抜けているらしい」

「らしい？どういうことですか？」

「そういうことは自分では気付かないものだ。私もどこか抜けているらしいが私はそんな自覚がない」

「そういうものですか・・・」

「気になったら5年生の教室にでも来て見ろ、面白いものが見れるぞ」

楽しそうな顔でこっちを見る

「いえ、遠慮しておきます。これ以上登場人物が増えると流石に作者も見ているほうも疲れるので・・・」

ただでさえ登場キャラが多いんだ

もし5年生の教室にいったら新しいキャラが出るだろうから
そんな事になったら見ている方が混乱してしまうだろう

「確かにそうだったな」

納得したかのような返事

やはり初期段階でキャラを出しすぎたな

「ところで天和、お前女はいるのか？」

「…は?…」

急な質問についそっけない返事をしてしまう

これでは俺の印象が悪くなってしまいかもしれん
早く返答しなければ

「いえ、…いませんよ……」

いる、と言いたいが俺はこういう事にはひどく無縁な健全な生徒だ
誰かいい人いないかな。とついため息をつく

「そうか、そうなのか。なるほどな」

しかし何でこの人はそんな事を俺に聞いてきたのだろう

いくら考えた所でその理由など見つからない

別にそんな話をしていたわけではない

こういう時は考えても始まらないのだから聞くのが一番だよな

「なぜ、そんな話を？」

「いや、私と共に歩いている事で変な誤解を生まないためだ」

「変な誤解？」

「気にするな、お前の場合彼女などはいないんだろ。なら大丈夫だ」

「は、はあ」

なるほど…そう言う事か

たしかに二人きりで下校……

…そうみられるよな…

「まあ、お前が私とそうみられるのが嫌なら私は少し離れた所にしよう」

「い、いえ問題ないです。それに離れたらいざと言うときに対応できないですし」

まあ、そう見られたら結果OKと言う事で
そのまま実際に出来たら

世論に流されて……なんて

ってツチもう家か

邪魔な家だ。消しちまうか…

「私の家はこころへんだ。じゃあな天和」

「さようなら」

そう言つてクラリスさんは角を曲がつていった

…ってことはクラリスさんの家は俺の家の近くと言う事かこれはい情報ゲットした

去りゆくクラリスさんに手を振りながら俺はそんな事を考えていた

「京介、彼女か？」

「へ？うわぁ」

いきなりの声に驚いて後ろに下がる
そこに立っていたのはラインだ

「彼女じゃないよ。生徒会の役員」

「ふーん、そうか。面白みのない」

此奴何を面白がっているんだ

「てかここで何してるんだ？」

俺はふと思った疑問を投げかける

「ん？お前が見えたから呼びに来ただけだ」

「そうかなら家に入るぞ」

そういつて家に入る

そこには今日も……

「おかえり」

あの二人がいた

「あれ？風紀委員戦は終わったのにまだいるのか？」

アリスに話しかける

「え？それはまだ広報委員戦があるから……」

こんな質問をした俺だが何故此奴がここに居座るかその理由は分かっている

どーせこいつはラインの事が好きとかそんな理由でいるんだろう

「えーとお前は誰だっけ？」

横でパソコンを広げている少年に向かって一言

「浪川鳴海、名前ぐらい覚えてくれ。俺がここにいる理由はここに住みやすいからだ」

聞いてない事まで教えてくれた
意外と優しいやつなのか

「お疲れ、今日は大変だっただろう。飯食ったらさっさと寝ろ」

ラインめあいかわらずそっけないな
ま俺を心配してくれるのが分かる

「ライン、私も頑張ったわよ」

「そうだなアリスもお疲れさま」

照れて赤くなるアリス

…まったく俺も優しくなったもんだ
この光景を見て心を落ち着かせているなんて
…？なんで包丁を持っているかって？

それはラインを切り刻むために決まっているじゃないか
他人の不幸は蜜の味。正確には他人の幸せは壊してナンボ
…俺の右手が叫ぶ、その手でアイツを壊せと
今の俺ならやれる、やれる気がする

……と理性を失いかけていた
落ち着け俺、殺すならちゃんと後処理まで考えないと……

「天和、そこまでしておけ」

へ？どういうことだそこまでって…

「さっきから怖いことを呟いて…」

なるほど俺としたことが作戦を口にしてしまっていたようだ

今度からは直さないとな

「まったく京介は……」

アリスが呆れたよう話してくる

「すごいことしたらしいわね」

「すごいこと？」

頭をフル回転するが当てはまるような出来事が……

「風紀委員近衛隊を倒す時に……」

あつた……

「ああ、それか…守護霊を使った魔法だな」

「それよ、なんで使ったの？」

「流石に使わなければ勝てない状況だった」

「京介、それでどうだった？」

ラインがいきなり話に入ってくる
こいつはいつもいきなりだ

「どうだったとは？」

「相手の反応だ、相手は無事か？」

「ああ制限がかかっていたようだ」

そしてその時の事を逐一話す

話した後はだんだんと眠くなってきた
晩飯を食ったらさっさと寝よう

人物紹介

あまわきようすけ

天和京介

この物語の主人公

クラス)

3年A組

役職)

生徒会会計

黒髪に黒い瞳の日本人らしい顔つきをしている

成績は学力学年主席、実技学年主席、総合学年主席と3年生でトップに立っていて

学院内で決められているランク付けではAランクと高位のランクを保持しているが

いつもはそこまで頭を回転させてはいないので頭がいいようには見えない

魔具)

いつもは腕輪になっていて発動すると刀の形になる

>生徒会<

デューク・ウエルキンス

クラス)

5年A組

役職)

生徒会長代理

金髪で琥珀色の瞳のイギリス人

5年生で生徒会長代理をしていると言ったことでいつも張り切っている

厳しい言動が多いが、デュートリヒに言いくるめられたりと意外と口車に乗りやすい

単純な人

魔具)

発動する前はネクタイピン

デュートリヒ・フェルステンブルク

クラス)

7年A組

役職)

生徒会副会長

銀髪、碧眼のドイツ人

責任感の強い生徒会のまとめ役。主人公に優しい

人を見下すような人間が大嫌いで風紀委員長の華欧との仲が悪い

魔具)

普段は首飾りになっている発動すると長剣に変わる

ヴィルヘルム・セイデリア

クラス)

6年C組

役職)

生徒会庶務

肌の色に近い髪の色をしていて瞳の色は赤のスウェーデン人
いつも生徒会室にいる。そして気付かない間にいなくなる
話す時は基本、大事なことだけ纏めて話し、無駄な事を殆ど言わ
ない

魔具)

普段は腕輪、発動時は長剣になる

コンティニュー・リボン

クラス)

5年D組

役職)

生徒会書記

金髪、碧眼のアメリカ人

デュートリヒが大好きでいつもデュートリヒにアタックしている。
しかしいつも断られている
いつもはのんびりしているがデュートリヒが関わるとその動きは
一変する

魔具)

いつもはピアス。発動すると双銃になる

ルイ・メイエ

クラス)

4年A組

役職)

生徒会会計

金髪、琥珀色の瞳をもつフランス人

どこかが抜けている人が多い生徒会の中で珍しい常識人
背が低いことを気にしている

魔具)

普段は指輪。発動時は本

クラリス・ヴァイセ

クラス)

5年C組

役職)

生徒会副会長

銀髪、緋瞳のドイツ人

生真面目で堅物な人。頼まれた事は必ず成し遂げる
仲間思いな面もあり京介がピンチの時には大抵駆けつけている

魔具)

通常時は首飾り。発動時は双剣になる

クルト・ジークムント

クラス)

4年C組

役職)

生徒会副議長

紺色の髪に黒い瞳のオーストリア人

なにかと京介に突っかかるが結局は助けてくれる優しい人

生徒会執行部を絶対無敵と信じているため生徒会執行部を舐めて
いる生徒には実力を見せ付け

生徒会執行部のすごさを知らしめようとしている

魔具)

発動前は腕輪で発動時は斧

ジャンナ・ファレビア

クラス)

5年B組

役職)

生徒会議長

金髪、緑の瞳を持つロシア人

必ず頂点に立つことを好む人で女王様気質
クルトと仲がいい

魔具)

発動前は手袋で発動後はムチ

ティーナ・オリベ

クラス)

6年D組

役職)

生徒会書記長

茶髪で茶色の瞳を持つイタリア人

いつもおっとりしている僕っ娘

生徒会メンバーの破天荒さにいつも困っている

物知りなので解説役に回ること多数

魔具)

発動前は指輪。発動後は槍になる

アリス・レーヴァテイン

クラス)

4年A組

役職)

生徒会監査

金髪、緋眼のオーストリア人

京介と仲がよく京介を生徒会に推薦した張本人

しかし本人としては京介に対しての好意は皆無といっても良い

魔具)

普段は指輪で発動すると大剣になる

> 3年A組<

クラルヴァイン・ジークムント

役職)

学級委員長

紺色の髪に紺色の瞳を持つオーストリア人

別に生徒会メンバーではないのだが京介と仲がいいので生徒会が
らみの騒動に巻き込まれる

クルトの弟で愛称はクラル

中性的な外見でたまに女に見られる

魔具)

発動前は腕輪。発動するとレイピアになる

こうせいりん
皇聖院凜

黒目、黒髪の日本人

竹長学園から転向してきた転校生

お嬢様でその声は皆の癒しである

聞かれたことには何でも答える。例えそれがどんな内容であろう
とも

こうめい
候美華

茶髪で茶色の瞳の中国人
明るい性格でいつも笑顔である

あきみやはやこ
秋宮隼人

成績優秀な坊ちゃんて運動が苦手
いつも回りに気を配っている。が・・・
・・・食事の時はいつもと違いまわりの目を気にせず豪快に食べる

なみかわなるみ
浪川鳴海

オタクな男の子、ネットゲームにはまっている
それは寝ない日もあるくらいである
授業はできないがアニメなどに関する知識は深い
常時パソコンを持ち歩き独自に情報を集め統制している為その知識を借りることも多い

>その他<

ライン・ギルベルト
クラスC

4年B組

金髪、翡翠色の瞳を持つオーストリア人
京介の家に居候している。京介とは仲良し

アリスとは幼馴染である

アニメオタクだが勉強もそこそこできる

魔具)

普段は眼鏡、発動すると剣になる

第十一話

良い朝だ

風紀員と戦う事もなく

どこかと戦うわけでもない

これほど気持ち良い朝は……二日ぶりか…

一日が一週間でも一か月にも感じるくらい長い気がした

それほどまでに風紀委員会との戦争は大変だった

しかいそんな風紀委員との戦争も終わって今日は平和だ

空も青い…透き通るほどに青い空は俺の疲れをいやしてくれる

まぶしいほどの朝日は俺を気持ちよく起こしてくれる

なんて気持ちいいんだ

しかし……

「くそ、押されているな」

「大丈夫だまだいける。これをしのいだら寝よう」

そんな俺の横でゲームをする二人、ライン・ギルベルトと浪川鳴海
この二人はまた徹夜でゲームをしていたようだ

「お前らそんな事言ってるがもう朝だぞ」

「もう、朝か……」

「一日は短いな……」

だめだこいつら……

まあ構っている場合でもないので
制服に着替える

一階に降りると今日も生徒会監査のアリス・レーヴァティンがいた

「アリスか…おはよう。上の奴ら頼んだぞ」

「頼んだって、あんたは？」

「ん？やり残したことがあるから一足早く学校に行っておく」

「了解」

そういつて家の外に出るとそこには1人の女性がいた

昨日ともに帰った生徒会副会長クラリス・ヴァイセさんだ

「あれ？クラリスさん、どうしてここに？」

「お前の護衛だ、文句あるか？」

「は、はあ」

せつかくの美女との登校イベント逃すはずがない

俺は表面上は何ともないふりをしながら

歓喜に震えながら並んで歩く

学校に到着。かなり早い時間なので朝練以外の生徒は見当たらない
俺はクラリスさんと別れ教室へ

そして教室に行き準備を済ませると生徒会室へ向かう

途中クラリスさんと再会し生徒会室のドアを開ける

「おお天和にクラリスであるか、朝から早いであるな」

中には生徒会長代理デューク・ウェルキンスさんがいた
この人は一体いつからここにいるんだ

生徒会長代理ともなれば仕事が多いのだろうか

「会長代理、早いですね」

「まあな、風紀委員と戦っていても書類は来るのでなそれをまとめるのに時間がかかったので学校が開いた瞬間から学院に入り整理をしていたんだがなかなか終わらなくてな」

学校が開いた瞬間！？

ということは30分以上も前から学院に来ていたと言う事か

「会長代理、今日も早いですね」

…今日も？

ということはいつもこのぐらいの時間帯に来て事務をしているのか
生徒会長代理恐るべし

そっいえばなんで代理なんだそんな聞いてみるか

「あ、あの……」

「…お前達早いな」

生徒会庶務ヴィルヘルム・セイデリアさんが後ろから入ってくる
この人も朝から生徒会室に来るのか

「ヴィル、おはよう。あなたも早いわね」

「そうでもない、これが普通」

この人は相変わらず最低限の事しか話さないな
これ無口というのかな……

「天和、例の案件は大丈夫か？」

「すみません、まだ終わって無くて。そのために今日は早く来たんです」

「急がなくていい、期限はまだある」

そういつてヴィルヘルムさんは作業に入る

横を見るとクラリスさんも作業をしていた

二人が一体何をしているかは気にはなつたが俺自体が暇ではなかったので

自分も作業に入る

+ + + +

昼休憩

まだ終わりそうにないので生徒会室に向かう

誰かが読んでいた気がするが構っていられるほど暇ではないので無視する

生徒会室につくと、ドアを控えめにあける

中にはデュークさんとヴィルヘルムさんがいた

この二人は生徒会室に常時いるのか？

二人とも作業に集中しているようなので

声をかけるわけにもいかず席につき

作業をする

デュークさんは昨日ふざけていたように見えたが

ココだけ見たらすごい真面目だ

キンコーンカンコーン

予鈴か……

教室に戻らねば

そうして生徒会室を出ようとしたところで俺に気づいたデュークさんが呼びとめる

「天和、いたのか……」

「……いましたよ」

「最近後処理の書類が多くてな」

「はあ、大変ですね」

そう言ったデュークさんの声はまだ元気だった
すごい体力だ

「すまんがお前に用事を押し付けてしまうことになる。お願いできるであるか？」

「分かりました。やっておきます」

仕事が増えたがまあたいして疲れる仕事でもなさそうなので承諾した

+ + + +

放課後

H Rも終わり教室を出ようとする
すると

「天和く呼ばれてるぞ!!」

名前を呼ばれた

忙しいので無視しようとすると思き覚えのある声がして振り向く

「天和、会長代理から聞いていなかったか？」

「あゝ、あの地味な仕事ですね」

「地味でもこれが生徒会の仕事だから行くぞ」

クラリスさんに手を引つ張られ教室を出る

今日の仕事は学校内の視察？観察？みたいなもので

新学期が始まり部活動が本格的に動き出したのでそれを見て回ると
言う事だ

「我々が担当するのはA棟だ」

「少なくてよかったです」

最近知ったことだがこの学校には

A棟、B棟以外にも部活棟、特別棟、研究棟、図書館、開発棟、実験棟、休憩棟があるらしい

本当に大きい学校だ

その中でもA棟は部活の数も少なく

おとなしい部活ばかりなので簡単なわけだ

そんなんなら調べる必要もないのだが規則に五月蠅い生徒会長代理のせいで

やらなければいけない

あの人の場合逆らったら何されるかわかったもんじゃない

そのまま歩いていると前から俺の大嫌いな男が歩いてきた
デュークさんと同じく規則に五月蠅い生徒会副議長クルト・ジーク
ムントだ

「お前らいちやつくならよそでやれ」

「いちやついてなんかねえよ」

「確かに、お前じゃ不釣り合いだな」

「そうですね、さつさとどっか行ってくれ」

「言われなくても行く。無駄な事に時間を潰している暇はないので
な」

ひねくれ者で、人に好かれない

俺もこいつは好きじゃないが、たまに助けてくれたりもするので嫌
いではない

「クルトか…あいつはもうちょっと言葉づかいを直させるか」

「気にしないでください。あれがアイツです」

「天和はクルトに詳しいのだな」

「まあ一応……」

一応クラルと一緒にの時やクラルの家に行ったときに会ったことがある
クラルと正反対の性格の兄貴だった事にはビックリだったな

「まあ気にしている時間はない、行くぞ」

「はい、急ぎましょう」

+ + + +

視察を終え、生徒会室に帰ってくる

「疲れた〜」

「さすがにあんなことがあるのね……」

「どうした？何かあったか？」

「実は……」

大人しい部活ばかりと聞いていたが中には過激な部活があり特に物理が危険な実験用具をたくさん持ってきていたり、美術部での絵のがすさまじかったりと意外にすごい部活ばかりだった

今生徒会室の中には

デュートリヒさんとデュークさんとコンティーヌさんクラリスさん、
ヴィルヘルムさん、クルトがいる

一言言っただけで説明が面倒臭いので省略したい

「ところで天和、頼んでおいたものは出来たであるか？」

「はい、これですね、しかし何に使うんですか？」

「それは内緒である」

「分かりました」

しかしここはいいいなパソコン、冷暖房完備。最高じゃないかと俺も自分の仕事を纏めなきゃな

「終わったー！ー！ー！」

俺がそう高らかに宣言した時には空は赤く染まっていた
横には未だに仕事をしているデュークさん
他のメンバーはもう帰ったようだ
と、おもったらクラリスさんがいた

「クラリスさんまだいたんですか？」

「ああ、ちよつと用事があつてな」

「俺は用事終わったんで、帰りますけど頑張ってください」

「いや、もう終わったんだ」

「そうなんです、だったら一緒に帰ります？」

俺的には精いっぱいのアプローチ
さてどんな反応が来るか……

「別にかまわんぞ、方向は一緒だしな」

やった、一緒に下校がOKか
それだけでテンションあがるぜ
まるでギャルゲーだぜ

おっとテンションが上がりすぎて変な口調になってしまった
クラリスさんも心配そうにこっちを見ている
顔が近いですよ

玄関に出る

そこで待っていたクラリスさんに会う
なんだか彼氏と彼女みたいだ

二人で並んで帰っていく

「クラリスさんはどうして生徒会に入っただんですか？」

「私か？私は生徒会長に借りがあつてな、それを返すために来たんだ」

「借り？」

「ああ、大きな借りだ。あと生徒会長だからな、代理ではないぞ」

「そういえばなんで代理なんですか？会長は？」

「時が来れば話す、それまでは知らなくていい」

「は、はあ」

そう言ったクラリスさんの顔は何故か哀しそうだった
なんでいきなりシリラスになったんだ

「もうすぐクラス間戦争がある。気を抜くなよ」

「分かってます。俺の相棒が代表ですから」

「そうか……お前の相棒か、気になるな」

「気になるならA組に来てみてください。紹介しますよ」

「わかった。名前は？」

「クラルヴァイン・ジークムントです」

「ジークムント？クルトの弟か？」

「はい」

「なるほど、面白そうだ」

第十一話（後書き）

疲れた……

出来は悪いですが一応

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9544q/>

決戦！魔法学校の生徒会

2011年7月6日21時42分発行